令和５年度

研　究　紀　要

秋田県立横手高等学校
定時制課程

巻頭言

令和は教師も学び続けることが期待される時代

教　頭　　小林　真人

秋田県立横手高等学校定時制課程（青雲館）の令和5年度研究紀要が完成いたしました。忙しい業務をこなしながら、貴重な原稿をお寄せくださいました職員の皆様、紀要のとりまとめを担当された研修部職員の方々に感謝申し上げます。

令和4年12月の中央教育審議会の答申において、「新たな教師の学びの姿」が示されました。その総論では「個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、主体的・対話的で深い学び」を実現することは児童生徒のみならず教師の学びにも求められる命題と示されています。また教職生涯を通じて学び続け、生徒一人一人の学びを最大限に引き出す役割を果たし、生徒の主体的な学びを支援する伴奏者としての能力を備えることを期待すると示されました。その他の全内容を読むと、教師は個々の教育活動と研修等の他、生徒たちからも日々学び、その学びをまた教育活動に生かす。そして生徒たちの成長を通して教師自身も成長し、その積み重ねの中に喜びややりがいを感じさらに学び続けていく。このような循環が、「新たな教師の学びの姿」の理想だと解釈することが出来ます。なかなか難しいことですが、この理想に近づけるよう学校を挙げて日々精進したいと思います。

さて、本校は、令和5年度の教育の重点目標「一人ひとりの成長の支援と社会性の育成～見守る温かい目と社会につなげるための指導～」を掲げ、職員一丸となって、生徒個々の学習課題の解決と学力の伸長、困りごとや悩みの改善、健全な生活習慣の確立に取り組んでまいりました。また今年度は、コロナウイルス感染症の影響により、3年間中止や自粛をしていた様々な学校行事がコロナ禍以前のように学校を開放し参集型で行われるようになりました。各種学校行事において生徒、職員、保護者が一体となって取り組み大成功のうちに終了することができました。生徒の活動成果が一般の方々にもご覧いただく機会に恵まれたことは、職員一同大きな喜びであります。そんな活動の中から特に「職員研修」と「教育活動」について、いくつかの内容を研究紀要に記載させていただきました。本校の教育活動の一端を御理解いただければ幸いに思います。

最後に…「教育における教師の活動は地下に水脈を求めてコツコツ穴掘りをするようなもので、いくら掘れども水の出ない虚しさを感じることも多いです。しかし、ある日突然湧水して、歓天喜地することもあります。教師一人ひとりの研究を積み重ね、いつか地下水脈の全てが明らかになり、誰でも簡単に水が飲めるようになることを願います。」

目　　次

巻頭言

目次

1　令和5年度 校内研修計画・実施記録　1頁

学校評価会議（学校内評価）
学校評議員会（学校外評価）　及び　研修部評価と改善案について　2～4頁

2 授業研修

令和5年度研究授業の実施について　5～6頁

数学科（数学Ⅰ）学習指導案　7～8頁

研究授業を終えて　9頁

数学科分科会記録　10頁

保健体育科（体育）学習指導案　11～13頁

バレーボール学習カード　14頁

研究授業を終えて　15頁

保健体育科分科会記録　16頁

3　教育実践・職員研修紹介　17～33頁

令和5年度防災（地震・火災時）訓練、防災講話について　17～20頁

令和5年度こころの健康教室　21頁

本校の進路指導の取り組み状況について　22～24頁

令和5年度におけるICT活用の成果と課題について　25～29頁

特別支援教育関連の職員研修会の報告　30～31頁

総合教育センターC研修講座に参加して　32～33頁

4　校外研究発表紹介　34～62頁

令和5年度第74回全国高等学校定時制通信制
教頭・副校長協会教育研究協議会山梨大会

「単位制と年次制を併用する本校の特色と課題」

発表内容　34～37頁

発表資料　38～63頁

5　編集後記　64頁

令和5年度校内研修計画

研修部

1　目　標

校内外における研修の充実を図り、生徒理解の促進と指導力の向上に努める。

（1）校内研究主題

ア　『多様な生徒の実態に対応した学習指導のあり方について』

各教科における基礎・基本事項の精選と指導法の工夫・改善

イ　ICT活用についての授業研修の充実

（2）校内研修年間計画

多様な生徒の個性と能力に応える授業の工夫、生徒理解のための情報交換、研修会、相互授業参観、授業研修等の充実を図り指導力の向上を目指す。

2　職員研修計画

第1回	情報交換 ①	職員研修会（生徒情報交換①）　教育相談委員会が主導 4月10日（月）　B日課　職員朝会後～13:30　会議室 ・早急に対応が必要または対応に注意を要する生徒について①
第2回	情報交換 ②	職員研修会（生徒情報交換②）　教育相談委員会が主導 4月12日（水）　B日課　職員朝会後～13:30　会議室 ・早急に対応が必要または対応に注意を要する生徒について②
第3回	特別支援教育に係る研修	職員研修会（特別支援教育）　特別支援教育委員会と連携 7月24日（月）　13:30～15:00　会議室 「発達障がいのある生徒の行動問題の予防と対応策について」 高等学校特別支援チーム　教育専門監：菅原咲希子 先生
第4回	ICT関連の研修	職員研修会　教務部、教育情報委員会と連携 8月22日（火）　B日課　職員朝会後～13:30　会議室 「校務支援システムでの出欠入力に関する校内研修」 ・校務支援システムでの成績管理の実施に向けて、各クラス及び授業における出欠入力の方法について研修する

3　授業研修

相互授業参観	第1回	前期　6月28日（水）～7月12日（水）
	第2回	後期　10月24日（火）～11月6日（火）
研 究 授 業		11月20日（月）研究授業および協議会（分科会） 数学科と保健体育科（2教科で実施） 詳細は 5～16頁を参照

以下は令和5年度　学校評価会議における校内研修に関する職員の評価の結果である。

質問事項　32　教職員の研修は、適切に行われていると思いますか。

令和5年度		令和4年度	
そう思う	33.3	そう思う	12.5
ある程度そう思う	61.1	ある程度そう思う	43.8
あまりそう思わない	0.0	あまりそう思わない	37.5
思わない	0.0	思わない	0.0
わからない	5.6	わからない	6.3

質問事項　33　研修の成果が自らの向上と教育実践に生かされていると思いますか。

令和5年度		令和4年度	
そう思う	16.7	そう思う	0.0
ある程度そう思う	66.7	ある程度そう思う	62.5
あまりそう思わない	11.1	あまりそう思わない	31.3
思わない	0.0	思わない	0.0
わからない	5.6	わからない	6.3

この結果から、今年度の職員研修についてはその内容に一定の理解と成果があったことがうかがえる。
意見・提言として、「特別支援教育に関する校内研修の内容は生徒の教育に生かされていると思う。」というコメントがあった。

以下は令和5年度の研修部の自己評価、学校評議員からの評価と意見、次年度に向けた改善策を記載したものである。

令和5年度　校務分掌等の評価

評価領域	研修部

青雲館の 重点指導目標	「一人ひとりの成長の支援と社会性の育成」 見守る温かい目と社会につなげるための指導

青雲館の 実践指針	すべての教育活動において「チャレンジ精神の育成」を念頭に置き、これを通して、先行き不透明な時代に挑戦し、自己と社会の未来を切り拓く人材の育成を図り、人格の完成と進路目標の達成を含めた自己実現を支援する。

青雲館の 具体的な手立て	人間尊重の精神及び公共の精神の涵養 学校生活のあらゆる場面を通して、生命や人権の大切さを教え、倫理観や規範意識を涵養し、多様な価値観を認める人間尊重の精神、社会の一員として求められる公共の精神の育成を図る。

重点目標	校内外における研修の充実を図るとともに、生徒理解の促進と指導力の向上、多様な生徒の実態に即した学習指導のあり方についての工夫・改善に努める。	P
現状	大部分の生徒が学校生活において課題や困難さを抱えており、学習活動についても意欲的でない生徒が多いが、新型コロナ感染症の拡大が一段落した今こそが、授業の改善と指導力向上の大きな機会ととらえて活動していく。	
重点目標達成のための方策	・授業参観、各種研修会、研究授業・協議会を実施し、指導力の向上と授業改善を図る。 ・教務部などの分掌や特別支援教育委員会、教育情報委員会などの委員会と連携しながら、具体的な研修を推進していく。	

具体的な取組状況	・職員研修会においては、特別支援教育についての研修とICT関連の校内研修を実施することができた。 ・授業研修については、相互授業参観（2回）と研究授業（2教科）を計画通り実施した。 ・今年度より、4月当初の生徒情報交換は、教育相談委員会の主導で研修会を行うこととした。	D
達成状況	・授業改善については、相互授業参観と研究授業および協議会の実施により、自己の授業を振り返るとともに指導力の向上を目指す端緒とすることができた。 ・特別教育支援委員会や教育情報委員会と緊密な連携を図ることにより、今年度の職員研修における目標はほぼ達成できた。	

自己評価	(評価) B	(根拠)今年度の校内研修計画についてはすべて予定通りに実施することができ、研修の充実を図ることができたが、多様な生徒の実態に即した学習指導のあり方については、今後さらに具体的に取り組むべき課題である。	C

（評価基準）A：具体的な活動がなされ、目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） A	・特別支援関連も含め各種研修の着実な実施に感心しました。授業研修に関しては、先行き不透明な時代を生き抜く力として「探究姿勢の育成」が目　指されていることを踏まえ、その観点から効果的な授業か否か研鑽していただければと思います。観点の統一により有意義な研修が行われることを期待します。 ・授業の改善に向けて様々な講習会、研修会や個々の教育機関と連携しながら精力的に取組んでいることは評価できると思います。	C

評価に基づいた改善策	・研修部が単独で活動することには限界があるため、校内の研修会については、年度の目標を明確にしながら、各専門の委員会等と綿密に連携していくことが今後も求められる。 ・授業研修についても、教務部や各教科との連携をさらに密にするとともに、共通の課題を具体的に設定しながら取り組んでいきたい。	A

令和5年度の研究研修は次の通り実施された。

令和5年度 研究授業の実施について

研修部・教務部

1　目　　的　　教科の枠を越えた授業参観や研究協議会により、指導法の工夫や改善に役立て、授業力向上を図る。

2　校内研究主題

ア　『多様な生徒の実態に対応した学習指導のあり方について』

各教科における基礎・基本事項の精選と指導法の工夫・改善

イ　ICT活用についての授業研修の充実

3　日時・日程　　令和5年11月20日（月）　特別C日課

1校時　　13:10～13:50（40）

2校時　　13:55～14:35（40）

3校時　　14:45～15:25（40）

SHR　　15:25～15:30（Ⅰ部終わり）

※　研究授業以外の受講する授業がない生徒は3校時で放課

4校時　　15:40～16:25（45）

研究授業　【数学科】　　担当者：後藤　一
1年次B組　数学Ⅰ：1B教室

【保健体育科】　担当者：熊林　孝
3年次B組　体育（バレーボール）：体育館

全体協議会（分科会）　図書視聴覚室　黒板側：数学　　反対側：保健体育
16:40～17:25（45）　・授業者より反省　・グループ協議

5校時　　17:50～18:30（40）

6校時　　18:35～19:15（40）

7校時　　19:25～20:05（40）

SHR　　20:05～20:10（Ⅱ部終わり）

＜役割分担＞

・分科会：司会　数学科　鈴木健夫
　　保健体育科　萩原　亨

　　記録　数学科
　　保健体育科

・参観・分科会　希望調査

・その他（準備）　模造紙、付箋等

・当日の時間割　佐々木（作成済み）

・資料の印刷、製本　16日（木）全員で

分科会　16：30～17：10（40）　場所：図書視聴覚室
　　黒板（東）側：数学　本棚（西）側：保健体育

【分科会次第】

（1）授業者より反省

（2）グループ協議　①学習課題　②生徒の活動について

（＋）良かった点（桃色の付箋）
（－）改善が必要な点（水色の付箋）
　　参観者からの提案（黄色の付箋）

①②の順で協議を実施する。

※　付箋は1セット（各色10枚ずつ）

数学科「数学Ⅰ」学習指導案

対　象：第１学年次普通科Ｂ組１９名
場　所：１年Ｂ組教室
指導者：教諭　　後　藤　　一
教科書：数研出版　新高校の数学Ⅰ

１　単　元　名　２次関数

２　単元目標　　２次関数について、数学的活動を通して、その有用性を認識するとともに２次関数の値の変化やグラフの特徴について理解する。

３　単元と生徒

(1)　教材観　　今までの数学の思考や知識の中では初めて経験する考え方、捉え方を含む教材であると考えている。中学３年生の授業の中でよく似ている内容を取り扱うが、その際のイメージを期待したい。また、知識の定着に留まらず、日常生活においても活用が期待できると考えており、十分な学習効果が得られるよう、その取り扱いに十分配慮し、指導したい。

(2)　生徒観　　思慮深く、落ち着いた態度で授業に臨むことができる。知識･技能については個人差が大きく、丁寧な展開や指導内容を絞った授業を目指したいと考えている。少しずつではあるが、意欲をもって学習に臨み、『思考する』場面が増えてきている感がある。

４　単元の計画　・関数　　３時間
・１次関数のグラフ　　３時間
・２次関数のグラフ(1)　　５時間
・２次関数のグラフ(2)　　４時間　本時(３／４)　全１６時間
・確認問題　　１時間

５　本時の指導　１４／１６　時間目
（１）指導内容　第１節　２次関数のグラフ(平方完成)
（２）目　標　　一般形で示される２次関数を標準形に直し、グラフを描くための情報を知ることができるようになる。
（３）評価の観点

目標	数と式，図形と計量，2次関数及びデータの分析について理解させ，基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り，事象を数学的に考察する能力を培い，数学のよさを認識できるようにするとともに，それらを活用する態度を育てる。		
評価の観点	A 知識・技能	B 思考力・判断力・表現力	C 主体的に学習に取り組む態度
	数と式、図形と計量、２次関数及びデータの分析についての基本的な概念や原理・法則を体系的に理解するとともに，事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付けるようにする。	数と式、図形と計量、２次関数及びデータの分析についての基本的な概念や原理・法則を体系的に理解するとともに、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付けるようにする。	数学のよさを認識し数学を活用しようとする態度、粘り強く考え数学的論拠に基づいて判断しようとする態度、問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善したりしようとする態度や創造性の基礎を養う。

6　指導の展開

	学習内容	生徒の活動	教師の活動	評価の観点
導入 10分	前時の復習	・次の２次関数の式を標準形に直しなさい。 (1)　$y=x^2-2x+3$ (2)　$y=x^2-6x+10$	・復習問題の解答を板書する。	・既習事項である式変形ができる。(A)
展開 20分	(学習内容の提示)	板書① $y=x^2-2x-1$　を標準形 $y=(x-\triangle)^2+\bigcirc$ に変形してみよう。 ・自分で考察する。 ・周辺と協力して考察する。 ・考察した内容を共有する。 板書② (解答を書く) $y=x^2-2x-1$ $=x^2-2x+\{1+(-2)\}$ $=x^2-2x+1-2$ $=(x^2-2x+1)-2$　$=(x-1)^2-2$ 板書③ $y=x^2-6x-7$　では？ ・自分で考察する。 ・周辺と協力して考察する。 ・考察した内容を共有する。 板書④ (解答を書く) $y=x^2-6x-7$ $=x^2-6x+\{9+(-16)\}$ $=x^2-6x+9-16$ $=(x^2-6x+9)-16$　$=(x-3)^2-16$ 板書④ (解答を書く) $y=x^2-\triangle x+\bigcirc$ $=x^2-\triangle x+\{(\triangle の半分)^2+\square\}$ $=x^2-\triangle x+(\triangle の半分)^2+\square$ $=(x-\triangle の半分)^2+\square$ 板書⑤ $\square=-(\triangle の半分)^2+\bigcirc$　ではありませんか？ 板書⑥ (解答を書く) $y=x^2-\triangle x+\bigcirc$ $=x^2-\triangle x+(\triangle の半分)^2-(\triangle の半分)^2+\bigcirc$ $=x^2-\triangle x+(\triangle の半分)^2-(\triangle の半分)^2+\bigcirc$ $=(x-\triangle の半分)^2-(\triangle の半分)^2+\bigcirc$	・本時の目標、学習課題の確認、プリント等の配付。 ・次の示唆をする。 「－１を無理矢理 $-1=1+(-2)$ とすれば･･･。」 ・変形はできたが、直しにくさがあることを確認する。 ・問いを板書し、今まで学習してきた事項を活用を意識することを示唆する。 ・１～２分程度待つ。 ・既習事項である、式の展開・因数分解の知識を活用することによって、数字間の因果関係が見いだせることを示唆する。 ・更に□に入っている数字にも注目するよう指示する。 ・「平方完成」の説明を行う。 ・$+(\triangle の半分)^2-(\triangle の半分)^2$ の 一見、無意味に思われるこの部分があるからこそ、一般形から標準形に変形する上で重要な部分であることを確認する。	・式変形に至る重要な数値を見つけようとしている。(B) ・「平方完成」について理解しようとしている。(C)
整理 20分	演算練習	・配付したプリントの練習問題を解く。 ・次時の課題を板書する。 板書① $y=2x^2-8x$　を変形してみよう。	・生徒が理解をしているか確認する。 ・次時の内容を提示し、本時の内容を応用・活用して、解答できることを示唆する。	

7　協議の視点　　多様な生徒の実態に即した授業になり得たか。また、なり得るためにはどのような視点が必要であったのか。

研究授業[数学科（数学）]を終えて

教諭　　後　藤　　一

1　はじめに

数年ぶりに『授業を観られる』経験をすることになった。進度の都合から2次関数のグラフ『平方完成(一般形から標準形への変換の工夫)』を実施することになり、それなりに心血は注いだと自負はしているが、今回も伝えきれていないことを感じているのが実情です。『生徒に伝える』仕事に就いてからかなりの時間が経つがどうして伝えきれないのやらと･･･、反省ばかりです。

2　授業の反省

研究授業を実施したクラスは『思慮深い』『穏やかな』印象が強く、活発な活動が難しいと判断し、教員主体の授業を展開させてもらった。教員主体ではあったが、生徒に思考･活動させる時間も持たせつつ、　大勢いる前での発言ではなく呟けるように教材を組み立てたつもりであります。授業がうまくいかなくてもいいのですが『自分の伝えたいこと』が伝わったか伝わらないかが気にしているので、そういう意味では「(半分くらいは)伝わったんじゃないかなぁ･･？」と考えています。

3　まとめ

授業終了後のグループ協議では今後の授業改善に向けて多くの提案をしていただいた。耳の痛い提案ばかりだった。今後も生徒がイメージしやすいよう教材研究に励み、わかりやすい授業、取り組みやすい課題設定を意識していきたいと改めて感じました。

今回いただいたご意見やご提案をもとに授業改善を一層進めていきたいと考えています。

分科会記録

期　日	令和５年１１月２０日（月）　１５：４０～１７：２５		
授業者	後藤　一	司　会	鈴木　健夫
場　所	図書視聴覚室		
参加者	佐々木　康至・武田　誠健・鈴木　健夫・後藤　一・門間　由紀子 福田　勇幸・加藤　龍之介・武田　紘		

（１）授業者より
・生徒が普段大事に思わないところに、大切な考え方が隠れていることに気づかせたいと考えている。
・生徒が納得感を得られるように授業を構想したが、作業に取り組まない生徒や数学が苦手な生徒など、全員に伝わる授業を行うことの難しさを改めて感じた。
・自分が狙いとして考えていた内容は授業内で伝えることができたと考えている。

（２）グループ協議
【協議の視点】
◎多様な生徒の実態に即した授業になり得たか。また、なり得るためにはどのような視点が必要であったか。

【良かった点】
・導入で前時の内容を丁寧に確認していた。
・色分けや記号等を系統的に使用していて見やすい板書になっていた。
・計算過程を最終的に比較できる良い板書構成になっていた。
・学ぶ意義などを訴えかけるような場面もあって良かった。
・一貫した問いかけが繰り返されていて、生徒も本時の問いに立ち返りながら授業に参加できていた。
・発展問題を用意しており、授業内容が易しく感じる生徒にも配慮されていた。

【改善点】
・生徒の発言や考えを共有する場面が少なかった。
・使用している色や記号の意味や共通点などを解説した方が、生徒もより理解しやすかったと思う。
・作業しない（できない）生徒への声かけが必要だと感じた。
・指導案に記載されていた計算過程の｛　｝を板書でも使用すれば、生徒達もより考えやすかったと思う。

【提案】
・残しておきたい板書はあらかじめ電子黒板に表示させておく。
・計算の目的を把握させるために、実際にグラフを書く作業も必要かもしれない。
・机間巡視を行って生徒の発言を拾いながら授業を行うと、より多くの生徒が授業に参加している意識を持てるかもしれない。
・板書とプリントの構成を揃えた方が､より取り組みやすい生徒いるかもしれない。
・生徒同士の対話だけではなく、生徒と教師の対話も必要だと思う。
・色を多用する場面もあるので、より認識しやすい色のチョークを用意した方が良いと思う。（学校全体のこと）
・授業中のタブレットの使い方について考えていくべき（学校全体のこと）

保健体育科（体育）学習指導案

秋田県立横手高等学校定時制課程

授業者 教諭 熊林 孝

指導日時　令和5年11月20日(月) 4校時

場　所　体育館

対象生徒　普通科 3年次B組 男子11名 女子10名 計21名

1 単元名 球技 ネット型【バレーボール】

2 単元の目標

（1）ラリーを続けることを重視して、ボール操作と定位置に戻るなどの動きによる空いた場所をめぐる攻防を展開できるようにする。(技能)

（2）バレーボールに積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、作戦などについて話し合いに参加しようとすることや、健康・安全に気を配ることができるようにする。(態度)

（3）バレーボールの特性や成り立ち、技能の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。(知識・思考・判断)

3 単元と生徒

（1）教材観

　バレーボールはネットを挟んで相対するチームがボールを相手コートの空いている場所に返球し、一定の得点に早く到達することを競い合うことを楽しむ運動である。基本的な技能や仲間と連携した動きを発展させて、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームが展開できることが求められる。空いた場所への攻撃を中心にラリーを続ける学習課題を追求しやすいように、プレイヤーの人数やネットの高さ、プレイ上の制限を工夫したゲームを取り入れ、ボールの操作とボールを持たないときの動きに着目させ、取り組ませることが大切である。

（2）生徒観

　バレーボールは、自分のボールコントロールミスが直接相手の得点になってしまうため、当初は消極的な生徒が多かった。しかし、基本技術の向上やお互いの教え合いや励まし合いにより自分ができることを積極的にプレイできるようになってきている。

3）指導観

本単元では基本的な技能を習得させ、攻防を楽しむことができるようになることを目標としている。

得意な生徒と苦手な生徒の教え合い、仲間と協力し励まし合いながら授業を進める中で意欲の向上を図り、より積極的に学習に取り組んでいけるように指導してきた。

4 単元の評価規準

（ア）関心・意欲・態度	（イ）思考・判断	（ウ）技能	（エ）知識・理解
・球技の学習に積極的に取り組もうとしている。 ・フェアなプレイを守ろうとしている。 ・分担した役割を果たそうとしている。 ・仲間の学習を援助しようとしている。	・ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身につけるための運動の行い方のポイントを見つけている。 ・自己やチームの課題を見つけている。	・空いた場所をめぐる攻防を展開するためのボール操作と定位置に戻るなどの動きができる。	・球技の特性や技能の名称や行い方について言ったり書いたりしている。 ・試合の行い方について理解し言ったり書いたりしている。

5 本時の指導計画

（1）目 標 コート内の空いたスペースをカバーし合って、ラリーを続けることができる。

（2）展 開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準と方法
導入	1 学習課題の確認	・活動内容を把握し見通しが持てるようにホワイトボードに明示する。	
	学習課題：空いたスペースをカバーするために声かけをしよう。		
		・プレイするときに必要な声かけの例をホワイトボードに明示する。	

展開	2 基本練習をする。 ・パス練習 ・サービス練習 3 男女に分かれてゲームを行う。 ・時間制（10分×2ゲーム）で行う。	・安全面に配慮させる。 ・チームの勝敗だけを競うのではなく、本時の目標を達成するために学習課題を意識してプレイすることを助言する。 ・ゲーム中にいい声かけがあった場合は得点の有無に関わらず、その場で称賛し、価値づける。	【観察】 コート内の空いたスペースをカバーし合って、ラリーを続けようとしている。 （ウ）
まとめ	4 個人の振り返りを行う。 5 チーム内で振り返りを行う。 6 まとめをする。	・本時の目標に対して各自のプレイの評価を学習カードに記入させる。 ・チーム内で1番チームに貢献した選手を称える。 ・教師側からも良かったプレイを取り上げることで、次回の授業も頑張ろうと思えるような声かけをする。	

6 協議の視点

目標達成のための「教師の支援」は有効であったか。

研究授業[保健体育科（体育）]を終えて

教　諭　熊林　孝

1　はじめに

バレーボールは、2回続けてボールに触れることができず、1度のボールコントロールミスが相手の得点になってしまう可能性が高い競技であるため、これまで授業でバレーボールを実施しても多くの生徒がミスを恐れ動きが消極的になり、三段攻撃やラリーを続けることの楽しさを感じるまでに至らず実施期間を終えることが多かった。

研究授業を実施したクラスは、授業でバレーボールを始めた当初は前述のとおりであったが、男女とも授業が進むにつれて生徒同士の教え合いや励まし合いによりバレーボールの楽しさを感じるようになり積極的にプレイできるようになっていった。

今回は、さらにスムーズな連携プレイをするためにはお互いに声をかけ合うことの大切さを理解させることを学習課題として実施した。

2　授業の反省

本時の目標や学習課題、活動内容についてホワイトボードを見れば今日は何をするのかが一目でわかるような提示を意識した。さらに学習プリントを1人ひとりに配布をすることで学習課題や活動を明確にして臨むことができた。

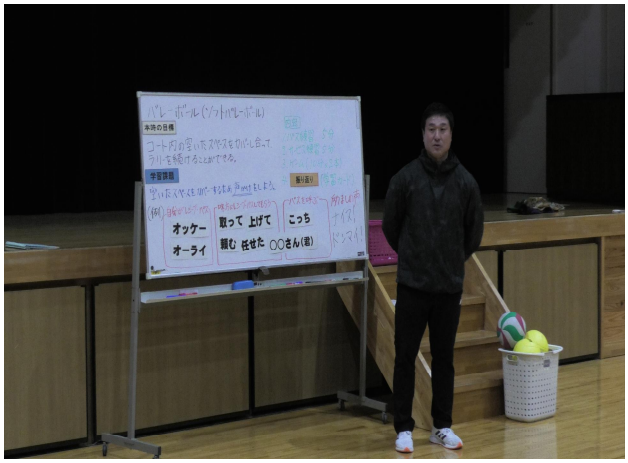
できるだけ男女とも活動量を多くするため練習と試合を同時進行で実施したが、目標達成のための修正や対応について適切なタイミングでの声かけについては課題が残った。

振り返りでは自己評価だけでなく、チーム内で活躍したチームメイトを評価し発表し合うことで他者の頑張りを認める活動ができたと思う。

3　まとめ

授業終了後のグループ協議では今後の授業改善に向けて多くの提案をしていただいた。学習課題においては、生徒がイメージしやすいようにもう少しわかりやすい課題設定をした方がよいとご意見をいただいた。また、評価にはルーブリック表などの評価方法を取り入れてみてはどうかとご提案をいただいた。

今回いただいたご意見やご提案をもとに授業改善を一層推進していきたい。



２０２３．１１．２０（月）４校時

バレーボール　学習カード

３年次Ｂ組　　番氏名

【本時の目標】

コート内の空いたスペースをカバーし合って、ラリーを続けることができる。

〈学習課題〉

空いたスペースをカバーするために声かけをしよう。

☆どんな声をかければよいか？

意思表示の声（自分がレシーブ）　→　「オッケー」「オーライ」

指示の声（レシーブ、パスさせる）　→　「頼む」「任せた」「取って」「上げて」「〇〇さん（君）」

パスボールを呼ぶ声　→　「こっち」「〇〇さん（君）」〈手を上げる〉〈手を叩く〉

〖振り返り〗（評価Ａ・Ｂ・Ｃ）

- 目標を達成できた。　（　　）
- 学習課題を意識してプレイすることができた。　（　　）
- 意欲的に取り組めた。　（　　）
- お互いに助け合いながらプレイすることができた。　（　　）
- 周りの選手のいいプレイを見つけることができた。　（　　）

☆最後に・・・

- 今日、チームに１番貢献した選手は誰ですか？＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿さん
- その理由は？＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

分科会記録

期　日	令和５年１１月２０日（月）　１５：４０～１７：２５		
授業者	熊林　孝	司　会	萩原　亨
場　所	図書視聴覚室		
参加者	柴田　俊英、清水　達也、小西　宗子、 藤谷 淳一、 齊藤　超、 古関　直哉、 小西　あけみ		

（１）授業者より

ソフトバレーボールから始めたバレーの授業である。男子は普通のバレーボールで三段攻撃ができるまで進歩してきたところや，女子は転入生が入ってきてからより活発にプレーできるようになってきたところを見てもらいたかった。試合の勝ち負けにこだわらないようにするために、あえて点数表示はしていない。今回の研究授業を行うにあたって、目標を考えることが難しかった。目標やその達成のために支援の有効性について、協議をしていきたい。

（２）グループ協議

【協議の視点】目標達成のための「教師の支援」は有効であったか。

【よかった点】

・指示の板書と配布プリントの組み合わせにより、生徒は今日の目標や活動が明確な状況で授業に臨むことができた。
・練習中や試合中の要所要所で、教師・生徒ともに声かけができていた。
・生徒全員が声を掛け合いながら，バレーを楽しんでいる。
・まとめの話し合いをチームごとに具体的にできていた。

【改善点】

・試合間の休憩時間の使い方（目標達成のための修正や対応を工夫させたい）
・本字の目標や学習活動を生徒が常に意識できるよう、観察時の立ち位置や観察する方向などを考慮していきたい。
・空いているスペースのカバーをするような練習や声かけ自体の練習を取り入れてみてはどうだろうか。

【提案】

・「空いたスペースをカバーするために」という学習課題よりも、「ラリーを続けるために、声かけをしよう」の方が、生徒はイメージしやすかったのではないだろうか。
・評価をする際に、ルーブリック表などの評価方法を取り入れてみてはどうか。
・活躍した人を具体的に〇〇で活躍した人とするのはどうだろうか。

教育実践紹介

以下は本校での教育実践の事例をまとめたものである。

1　令和5年度　防災（地震・火災時）訓練、防災講話について

横手高等学校定時制課程
総　務　部

本年度の夏季防災（地震・火災時）訓練は、例年同様に、C日課の短縮授業で確保した時間を活用し「行事」として訓練を行った。以下に大まかな流れを示す。

令和5年度　夏季防災（地震・火災時）訓練実施計画

1 目　　的　災害（地震・火災）発生時における被害の局限・防止のため、冷静かつ適切な判断のもとで迅速に避難できる能力と知識を養い、防災意識の高揚を図る。

2 日　　時　令和5年7月5日（水）午後4時30分～5時15分　（C日課）

3 災害発生　午後4時35分　地震発生　　午後4時38分　火災発生

4 状　　況　授業開始時に地震及び火災が発生、生徒は各HR担任の指示に従い、速やかに行動する。

5 避難場所　ロータリー

6 実施内容　・各HRにおける事前指導（HR担任）
・地震発生の連絡（緊急放送：教頭）
・火災発生連絡（第一発見者から教頭、主査へ）
・火災発生の連絡（緊急放送：教頭）
・避難開始（各HRから避難場所へ：HR担任）
・119番通報（主査）
・人員確認、防火管理者への報告
・消火訓練（生徒2名、職員）
・講評（横手消防署）
・謝辞（校長）

訓練の成果と課題
成果
・緊急搬出係からの昨年度、課題とされた携帯電話の搬出については、どのようなパターンにも対応できるように、職員室内にいる副担任や教科担任に依頼して搬出することができた。
・中休みの時間を含め、様々な時間帯に（地震等が）発生することを想定した訓練が必要だという意見から今年度も継続して実施した。
課題
・校内の警報が鳴らず、放送のみで指示をすることになったため、事務部で後日、警報の操作をし、正常であること確認した。
・生徒誘導係から指摘があった、授業を行っている場面で、教科担任が対応に当たる場面が多いと思うので、何らかの機会に職員研修の一環として行ってみても良いのではないか、については、来年度初めに、研修部と協議し、職員研修の実施を検討していきたい。

冬季防災（地震・火災時）訓練については、従来の内容を変更して、新たに防災講話を実施し、その後に施設全体を消灯しての避難訓練を行うことになった。防災講話の講師は、県南NPOセンターから講師紹介があり、東日本大震災で被災された福島県の方が県南に在住し、語り部をされているとの情報があり、是非、生徒や職員への研修として実施することになった。以下に大まかな流れを示す。

令和5年度　冬季防災（地震・火災時）訓練実施計画

Ⅰ　防災講話

1 目　　的　東日本大震災の被災経験者の講話を実施することにより、災害時の対応について理解を深め、防災及び減災意識の高揚を図る。

2 日　　時　令和5年12月8日（金）午後2時55分～3時55分　（A日課・特割）

3 講　　話　演題「命を守る　～災害に備えるための心構え～」
大仙フレンズ代表　高橋　和美　氏

4 内　　容　・3.11大震災での経験～あの日に起こったこと～
・近年の秋田・全国での災害から
・被災地に必要だった物とは
・災害への備え、心構えなど
・講話後、生徒との質疑応答

5 参 加 者　・横手市役所総務企画部危機対策課長
・秋田県南NPOセンター事務局長
・学校評議員
※　取材（ABS秋田放送横手支局・秋田魁新報社横手支社）

講話の成果と課題
成果
・東日本大震災発生当時、本校生徒はまだ小学校入学前であり、東日本大震災の講話を聞き、震災の規模や被害の状況、原子力発電所の状況などを学ぶことができた。講師に対して6名の生徒から質疑があり、予想以上に活発な質疑応答になった。
・講話では、被災地で必要だった物や災害への心構えなどの説明があり、生徒の防災及び減災意識を向上させることができた。
課題
・講話の質疑では、講師の他に危機対策課長にも同席させ、質疑のほかに補足などもできたのではないかという職員からの意見があった。
・今回の講話で終了ではなく、次年度も継続して、さらに詳細な説明が欲しかったと、職員から要望があった。
・同席された県南NPOセンターの事務局長は、継続する要望があれば、講師のほかに、福島県で避難生活をしている人々と、オンラインでの交流が可能であるとの提案も頂いた。来年度も夏季と冬季の訓練を予定しているため、同日に講話やオンラインでの交流が実施が可能かを検討していきたい。

Ⅱ　冬季防災（地震・火災時）訓練

1 目　　的　災害（地震・火災）発生時における被害の局限・防止のため、冷静かつ適切な判断のもとで迅速に避難できる能力と知識を養い、防災意識の高揚を図る。

2 日　　時　令和5年12月8日（金）午後4時00分～4時30分　（A日課・特割）

3 災害発生　午後4時05分　地震発生　　午後4時08分　火災発生

4 状　　況　授業開始時に地震及び火災が発生、生徒は各HR担任の指示に従い、速やかに行動する。

5 避難場所　体育館

6 実施内容　・校内の照明を消灯（担当者）
・階段及び廊下に懐中電灯を準備（担当者・HR担任）
・各HRにおける事前指導（HR担任）
・地震発生の連絡（緊急放送：教頭）
・火災発生連絡（第一発見者から教頭、主査へ）
・火災発生の連絡（緊急放送：教頭）
・避難開始（各HRから避難場所へ：HR担任）
・119番通報（主査）
・人員確認、防火管理者への報告
・講評（教頭）

訓練の成果と課題

成果

・夏季の訓練で課題となった校内の警報装置は、正常に作動し計画どおり体育館に避難することができた。

・従来は照明を点灯したままの訓練であったが、地震等の災害時は停電することが予想されるため、訓練前に消灯した。消灯すると階段や廊下を避難する際に転倒する恐れがある為、事前に担当者やHR担任が危険箇所に懐中電灯を準備し、点灯させることで照明を確保することができた。

・防災講話後に避難訓練を計画したことにより、危機感を共有しながら避難することができた。

課題

・夏季と冬季の訓練を単体で計画するのではなく、2回の訓練を通じて、成果が上がるように計画をする必要がある。

・冬季は横手市消防本部からの派遣がない自主訓練となったが、自主訓練のほかに有効な訓練がないかどうかを横手市消防本部や横手市役所等と情報交換を行い、次年度の計画を検討していきたい。

防災担当としての感想

今年度は、夏季訓練はロータリーへの避難、消火活動を実施し、冬季訓練では、防災講話と自主避難訓練を行った。冬季訓練では、役割表を作成し、全職員が訓練に参加ができるように改善した。

年始に発生した石川県能登半島地震では、被災した上に、雪害が重なるという状況になり、これまでの事例では予想できない事態になってしまった。また、津波は、防波堤にぶつかりながら、次の波と合流して、さらに大きな波となり、短時間で家屋に到達している。本校周辺は、津波の影響は少ないが、生徒は将来、海岸沿いで津波の被害にさらされる可能があるため、津波の仕組みや避難方法についても講話等で学ぶ必要がある。

夏季訓練は、ロータリーへの避難、消火活動のみであるため、次年度は講話も追加して、地震や火災、津波、雪害の仕組み、建物の耐震性、避難所などに加えて、東日本大震災関連の内容を検討していきたい。次年度以降は今年度の経験を生かし、より実効性の高い防災訓練となるように計画していきたい。

【夏季訓練・消火訓練】

【冬季訓練・防災講話】

令和５年度におけるＩＣＴ活用の成果と課題について

情報教育委員会　臨時講師　武田紘

１．授業でのＩＣＴの活用について

◎成果について

授業でのＩＣＴ活用については、各授業で工夫をしていただき、充実した内容となってきていると感じている。その中から次の４つの事例を挙げる。

（１）クラスルームでの授業資料（PowerPoint 等）の配布（理科）

この授業では、授業で使用する PowerPoint や小テストの解説等をクラスルームに配布している。授業の PowerPoint については、事前にクラスルームで配布しており、授業中に見逃したスライドもその場で再確認したり、逆に先のスライドを確認することができ、生徒の習熟度に合わせて授業資料を活用できる。また、教員の手書き解説を配信する等、「いつでも見返すことができる」というクラスルームの利点を活かしている。

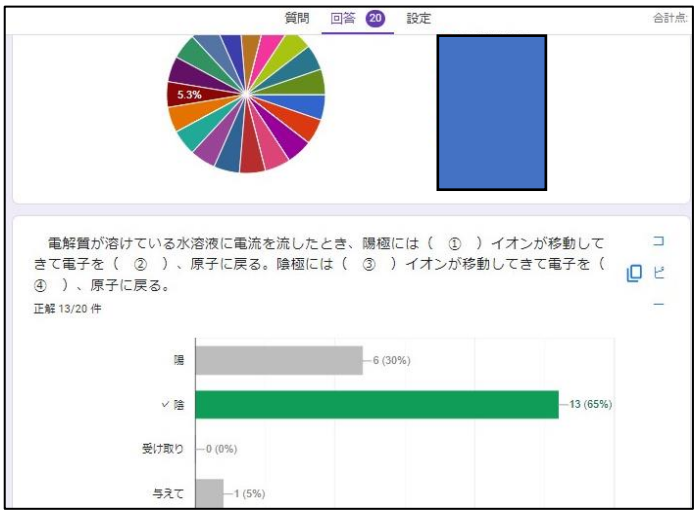
資料 1-1）クラスルームでの資料配付

（２）Google フォームを活用した振り返り問題の実施（理科）

資料 1-2）フォームで作成した問題

この授業では、Google フォームを活用して授業の振り返りを行っている。また、振り返りを提出させることで出席状況の記録も行うことができている。

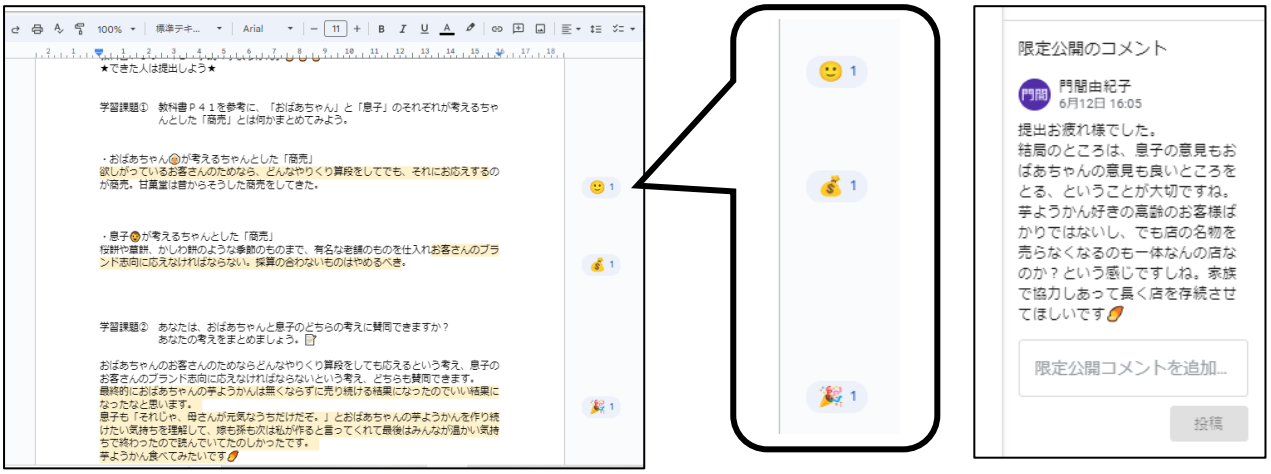
フォームの解答は、資料 1-3 のようにグラフ化されて自動で集計される。自動で集計された結果を、その後の評価に活かすことができ、自動集計という Google フォームの利点を活かしている。



資料 1-3）解答の集計結果

（3）Google クラスルームの「課題」機能を使用した教員コメントの返却（国語）

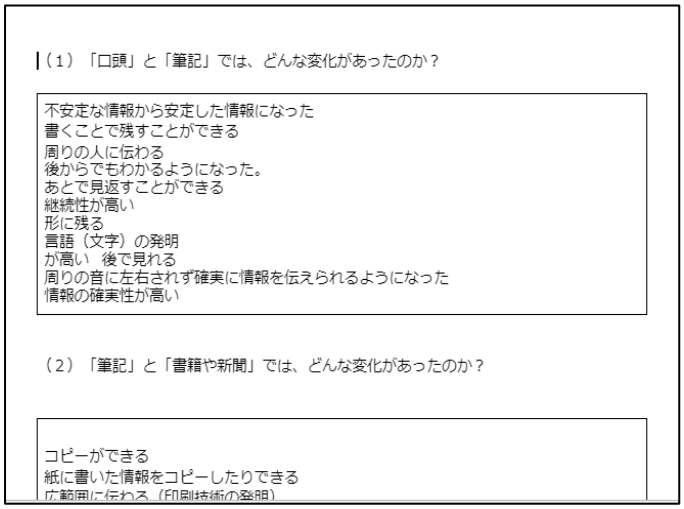
この授業では、クラスルームの「課題」機能を活用して、生徒の提出物に教員がコメントを打ち込むという取り組みをしている。資料 1-4 のように、生徒の提出物に直接マーカーを引いたり、絵文字でリアクションを入力している。さらに、生徒個人個人に限定公開のコメントを打ち込み、提出物に対するフィードバックを行っている。プリントに記入する際にはできない表現（絵文字等）を活かして生徒の表現の幅を広げながら、教員・生徒間のコミュニケーションを図っている。



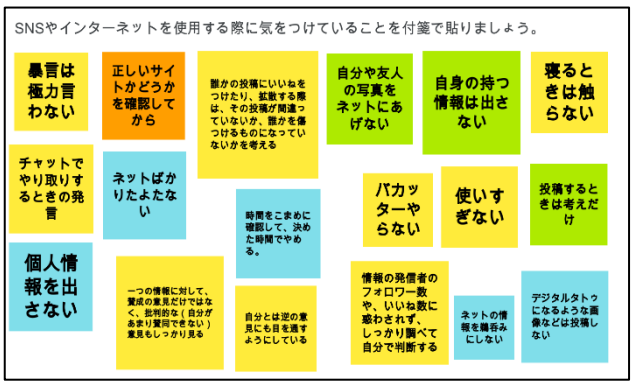
資料 1-4）生徒の提出物とそれに対する教員コメント

（4）Google ドキュメントや Jamboard を使用した生徒間の意見共有（情報）

この授業では、生徒の意見共有の場面で ICT の活用をしている。資料 1-5 の Google ドキュメントでは、共同編集機能を使用してリアルタイムにお互いの意見を確認し合うことができる。同じように Jamboard を使用した意見共有では、付箋の色分け等で出てきた意見をグループ分けするなど、授業の最初で意見出しをする際に利用できる。他者の前で発言したり表現したりすることが苦手な生徒でも自分の意見を発信しながら授業に参加することができる。



資料 1-5）ドキュメントでの意見共有



資料 1-6）Jamboard での意見共有

△課題について

授業中のタブレット等を使用した活動が充実していく中で、課題になっているのが「不適切なタブレットの使用」である。授業中のタブレット利用の機会が増え、それに伴って学習以外の目的でタブレットを利用している生徒がみられるようになった。

現状、校内でのタブレット使用については、校内規定集で以下のように規定されている。

・ログインした状態で放置しないこと。使用しないときはログオフするかスリープ又はシャットダウンしておくこと。
・学習活動等の教育活動に関係のないサイトにはアクセスしないこと。
・個人で各種ソフトウェアをインストールすることは認めない。ただし、授業で必要なソフトウェア等をインストールする場合は、学校の指示に従うこと。

（関係部分を一部抜粋）

以上のように校内でのタブレット利用についてはルール化されているが、それらがうまく機能していない状況にある。その原因の１つに、生徒一人一人に配布されている「青雲館生徒必携」に上記の内容が記載されていないことが挙げられる。今後はより明確なルールを設置し、職員・生徒間で共通理解を図っていく必要がある。

そのためにも、次年度以降は次の３点について取り組んでいく必要がある。

① 校内でのタブレット使用について、情報教育委員会だけでなく生徒指導部、教務部とも協議した上で、生徒の現状に合わせたルールを設置する。
② 青雲館生徒必携に校内でのタブレット利用についての内容を記載する。
③職員会議や各集会で、職員・生徒に内容を伝えていく。

今年度は課題を分析することに終始してしまったが、来年度以降は学習活動でのＩＣＴ活用を進めるために、課題の解決に向けて準備をしていきたい。

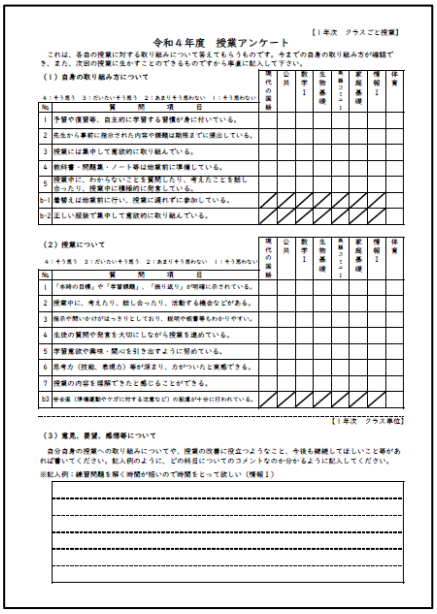
2. 学校業務でのＩＣＴの活用について

◎成果について

今年度は Google クラスルームや Google フォーム等を活用して、校内業務でのＩＣＴ活用に取り組んだ。その中から２つの事例を挙げる。

（１）授業アンケートの実施（Google フォーム）

今年度、昨年度まで資料 2-1 のように紙媒体で行っていた授業アンケートを、資料 2-2 のような Google フォームに変更して行った。フォームの作成には時間をとられるが、昨年度まで教務部の担当職員が手入力で行っていた集計作業をかなり効率化できたと感じている。また、集計されたデータを活用して、資料 2-3 のようなレーダーチャートにすることで、一目で回答結果の傾向を捉えることができる。



【１年次　クラスごと授業】

令和４年度　授業アンケート

これは、各自の授業に対する取り組みについて答えてもらうものです。今までの自身の取り組み方が確認でき、また、次回の授業に生かすことのできるものですから率直に記入して下さい。

（１）自身の取り組み方について

４：そう思う　３：だいたいそう思う　２：あまりそう思わない　１：そう思わない

No.	質問項目	現代の国語	公共	数学Ⅰ	生物基礎	英語コミュニ	家庭基礎	情報Ⅰ	体育
1	予習や復習等、自主的に学習する習慣が身に付いている。								
2	先生から事前に指示された内容や課題は期限までに提出している。								
3	授業には集中して意欲的に取り組んでいる。								
4	教科書・問題集・ノート等は他業前に準備している。								
5	授業中に、わからないことを質問したり、考えたことを話し合ったり、授業中に積極的に発言している。								
b-1	着替えは他業前に行い、授業に遅れずに参加している。								
b-2	正しい服装で集中して意欲的に取り組んでいる。								

（２）授業について

４：そう思う　３：だいたいそう思う　２：あまりそう思わない　１：そう思わない

No.	質問項目	現代の国語	公共	数学Ⅰ	生物基礎	英語コミュニ	家庭基礎	情報Ⅰ	体育
1	「本時の目標」や「学習課題」、「振り返り」が明確に示されている。								
2	授業中に、考えたり、話し合ったり、活動する機会などがある。								
3	指示や問いかけがはっきりとしており、説明や板書等もわかりやすい。								
4	生徒の質問や発言を大切にしながら授業を進めている。								
5	学習意欲や興味・関心を引き出すように努めている。								
6	思考力（技能、表現力）等が深まり、力がついたと実感できる。								
7	授業の内容を理解できたと感じることができる。								
b3	安全面（準備運動やケガに対する注意など）の配慮が十分に行われている。								

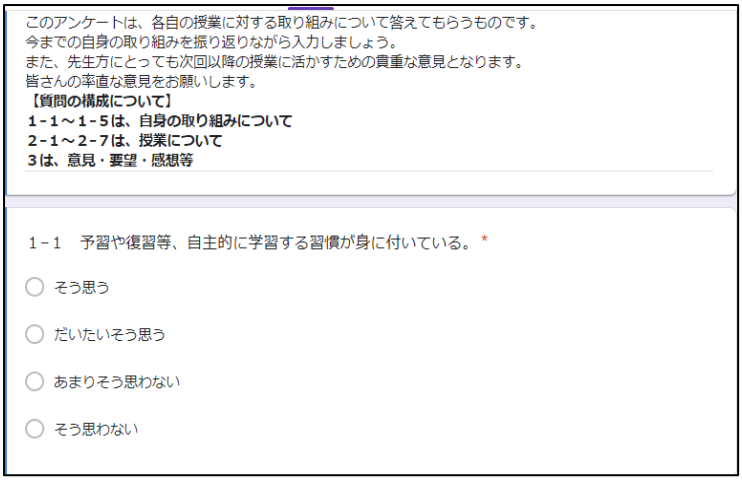
【１年次　クラス単位】

（３）意見、要望、感想等について

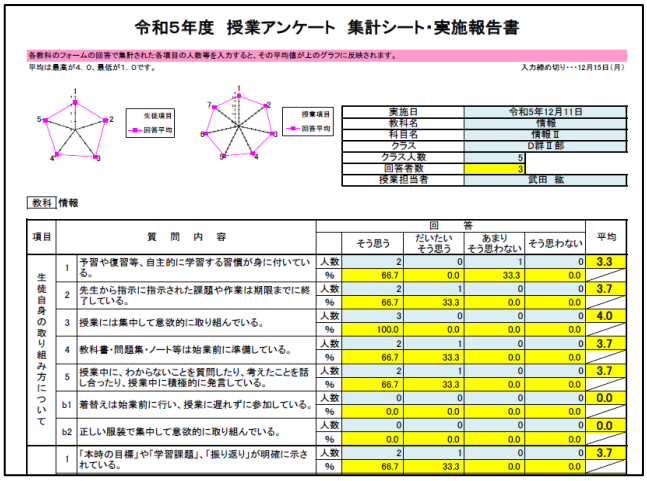
自分自身の授業への取り組みについてや、授業の改善に役立つようなこと、今後も継続してほしいこと等があれば書いてください。記入例のように、どの科目についてのコメントなのか分かるように記入してください。

※記入例：練習問題を解く時間が短いので時間をとって欲しい（情報Ⅰ）

資料 2-1）昨年度までのアンケート用紙



資料 2-2）授業アンケート（Google フォーム）



令和5年度　授業アンケート　集計シート・実施報告書

各教科のフォームの回答で集計された各項目の入数等を入力すると、その平均値が上のグラフに反映されます。
平均は最高が4、0、最低が1、0です。　入力締め切り・・・12月15日（月）

生徒項目 回答平均　授業項目 回答平均

実施日	令和5年12月11日
教科名	情報
科目名	情報Ⅱ
クラス	D群Ⅱ部
クラス人数	5
回答者数	3
授業担当者	武田　誠

教科 情報

項目		質　問　内　容		回答 そう思う	だいたいそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	平均
生徒自身の取り組み方について	1	予習や復習等、自主的に学習する習慣が身に付いている。	人数	2	0	1	0	3.3
			%	66.7	0.0	33.3	0.0	
	2	先生から指示された課題や作業は期限までに終了している。	人数	2	1	0	0	3.7
			%	66.7	33.3	0.0	0.0	
	3	授業には集中して意欲的に取り組んでいる。	人数	3	0	0	0	4.0
			%	100.0	0.0	0.0	0.0	
	4	教科書・問題集・ノート等は始業前に準備している。	人数	2	1	0	0	3.7
			%	66.7	33.3	0.0	0.0	
	5	授業中に、わからないことを質問したり、考えたことを話し合ったり、授業中に積極的に発言している。	人数	2	1	0	0	3.7
			%	66.7	33.3	0.0	0.0	
	b1	着替えは始業前に行い、授業に遅れずに参加している。	人数	0	0	0	0	0.0
			%	0.0	0.0	0.0	0.0	
	b2	正しい服装で集中して意欲的に取り組んでいる。	人数	0	0	0	0	0.0
			%	0.0	0.0	0.0	0.0	
	1	「本時の目標」や「学習課題」、「振り返り」が明確に示されている。	人数	2	1	0	0	3.7
			%	66.7	33.3	0.0	0.0	

資料 2-3）アンケート集計用紙

（２）生活体験発表の原稿提出（Google クラスルーム）

「生活体験作文」の原稿提出は、昨年度まで紙媒体で行われていた。紙媒体の場合、用紙の回収や内容の加筆修正を、生徒が学校にいる時間で行う必要があり、担当職員の負担増につながっていた。今年度は原稿提出をクラスルーム上で行えるように課題機能を使った形式に変更した。回収作業の効率化はもちろん、内容の加筆修正もオンライン上で行えるようになり、担当職員の負担軽減につながったのではないかと考える。生徒の作業についても、紙媒体の場合は手書きした文章を冊子にする際に、パソコンで打ち直すという二度手間が発生していたが、クラスルームで提出することで１回の文章作成で作業が完了する。

資料 2-4）クラスルームでの生活体験作文課題

△課題について

今年度、校内業務の様々な面でＩＣＴ活用に取り組んできた。その結果、業務の効率化や業務量の改善が見られた場面もあった。しかし、職員全員がその利用方法を理解して活用できているかと言われれば、難しい面もあると感じる。

その点を改善するためにも、校内のＩＣＴ研修を充実していく必要がある。情報科の教員などが参加しているＩＣＴ活用に関する研修が年に数回行われているが、その研修で得た知識を他の職員に伝える機会や手段を考えていかなければならない。

3.　統合型校務支援システムの活用について

今年度から秋田県の公立学校で統合型校務支援システムが運用され始めた。校務支援システムは、学校内での連絡共有や休暇、出張等の電子申請で用いられる「SchoolWare（スクールウェア）」と、成績管理や出欠管理を行う「教務支援システム“賢者”」で構成されている。

SchoolWare の運用に関しては、在校時間管理の利用はもちろん、連絡事項や掲示板を活用して職員間での情報共有を行っている。また、令和５年１２月までは休暇や出張の申請、出勤簿等、紙媒体の帳票を平行して利用していたが、令和６年１月からはこのような申請をペーパーレスで行うようになった。少しずつ紙媒体から電子媒体に移行しつつあり、来年度は二度手間になっていた業務が改善されていくと思う。しかし、未だ利用できていない機能も多く、現在紙媒体で運用している業務（図書館や会議室などの学校施設に関する利用申請、学校日誌等）を SchoolWare で行うことも視野に入れて検証をしていきたい。

“賢者”については、出欠管理システムを中心に運用を行ってきた。年度末にかけては成績管理システムの運用に向けて検証を進め、指導要録や調査書作成と連携できるようにしていく。しかし、本校の実態に合ったシステムとは言えず、設定作業にかなりの時間がとられている。科目に関する設定では、多くの選択科目ある点、その科目を年度の途中でやめることができる点、他学年履修等、本校の複雑な教育課程に対応できるシステムになっていない。さらに、３・４年生において、同一のクラスに卒業生と次年度以降も在籍する生徒が混在しているなど、システムでカバーしきれない点を挙げればきりがない。来年度以降はこれらに対応できるよう、業者とも共通認識を図りながらよりよい改善に努めていきたい。

本システムは今年度から運用が始まったため、成熟しきっていない部分も多々ある。本校の特徴に合った機能は積極的に利用し、難しい部分はある程度切り離して考えていく必要がある。来年度以降も難しい運用状況になると思うが、教職員の負担減につながるように精一杯務めていきたい。

特別支援教育関連の職員研修会の報告

特別支援教育委員会　藤谷　淳一

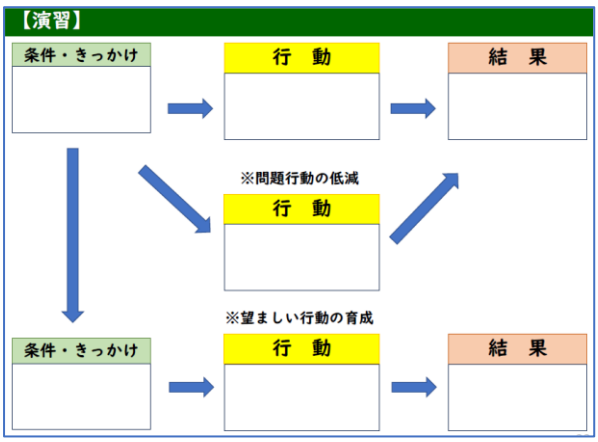
１　はじめに

本校では、生徒の理解を深め、教職員の指導力を向上させることを目的として、特別支援教育関連の職員研修会を実施しました。本校の生徒は、発達障害等の診断を受けている生徒が約４割を占めており、問題行動への予防と対応は重要な課題となります。この課題に取り組むために、秋田県立横手支援学校の菅原 咲希子　教諭（兼）教育専門監から、「発達障害のある生徒の行動問題の予防と対応策」についてご講演いただきました。

２　研修会の内容

研修会では、発達障害（自閉スペクトラム症、注意欠如・多動性障害、限局性学習障害）の生徒の特性と支援策について学びました。本校の生徒は、小中学校のときから学習や対人関係に困難を抱えている生徒が多く、自己理解や周囲の理解も不足しているように思います。これらはストレスや不安を引き起こし、不登校や暴言・暴力などの２次障害を引き起こす可能性が示唆されました。問題行動への対応は、見える行動だけでなく、その下にある生徒の特性や環境・状況等にも注目することが大切となります。生徒の行動を深層的に理解することが、効果的な支援策の提供につながっていくとお話がありました。

具体的な支援策としては、応用行動分析学の視点から ABC 分析を用いる方法が紹介されました。ABC 分析とは、行動（Behavior）の前に起こる「きっかけ（Antecedent)」と、行動の後に起こる「結果（Consequence)」を分析することで、問題行動が何によって引き起こされ、どういう影響を与えるかを理解する方法です。ABC 分析を用いることで、問題行動を減らし、望ましい行動を育てるための戦略を立てることにつながるとのことでした。



研修会では、ABC 分析の演習も行いました。＊左図参照。演習では、自分たちが直面する具体的な問題について、他の先生方と共に考える機会となりました。また、支援のゴールは、「生徒が自分なりの対処法を見つけて自立していくことである」ということも強調されました。そのためには、生徒の自己理解を促し、自分のよさに気付かせて自信をもたせることが大切となります。さらに、生徒が目標に向かって進むためには、明確な見通しと達成可能な小さな目標が必要です。そして、生徒が自分の能力を認識し、自信を持つためには、成功体験が必要です。成功体験は、生徒が自己効力感を持ち、新たな挑戦をする勇気を得るための重要な要素となるとのことでした。

３　まとめ

「みんな違ってみんないい」という考え方を基に、発達障害のある生徒の理解と支援について学びました。生徒の困難さに寄り添うための視点を大切にしていきたいと思います。また「チームで取り組む」ことの重要性を再確認する機会となりました。職員がチームとして協力し、共に問題解決に取り組むことで、より効果的な支援策の立案や組織的な特別支援教育の実践につなげたいと考えます。

今年度の取り組み状況と課題について（進路指導部）

進路指導主事　髙　橋　勝　彦

１　３年と４年修業生を分けて進路ガイダンスを実施
～卒業年数に応じたキャリア教育～

本校では３年間で卒業を目指している３修業生と、４年間の４修業生が在籍しクラスに混在している状況にある。そのため、今年度より従来の年次単位で実施していた進路ガイダンスを卒業年数に対応する内容に変更して説明することにした。

４年次部の過年度の総括では、３修業生よりも４修業生の就職活動が消極的な傾向にあるとの課題を改善していく必要があったため、今年度から４修業希望の３年次生も長期休業中にインターンシップを実施した。

２　就労準備という第三の選択肢　～就職移行支援事業への参加～

本校では令和３年度から通級指導を開始しており、特別支援教育が強化されたことで、高校入試での志願数が増加している。校内には、対象となる生徒が年々増加している。通級を希望する生徒は、広汎性発達障害（自閉症やアスペルガー症候群)、注意欠陥多動性障害（ＡＤやＨＤ)、学習障害（ＬＤ）などの発達障害を有している。就職指導を発達障害の生徒も含めて一斉に実施することは課題が多いため、障害福祉サービス事業所と連携して、生徒を長期休業中に就職移行支援事業の体験実習に参加、職業訓練をさせることに切り換えた。

保護者が生徒の障害者手帳を所有することについての理解が深ければ幸いだが、そうでない場合には、ハローワークや障害者福祉サービス事業所と連携し、職員から手帳を所有する利点、その手続きについての理解を深めさせる必要がある。

これまでの進路選択は、進学か就職かの二択であったが、就労準備という第三の選択肢を設定し、特に通級指導対象の生徒に、２年次からインターンシップで職業訓練の経験、障害者手帳の取得についても、関係機関の担当者を加えた四者面談をして、生徒の発達段階に応じた支援をしなければならない。

３　地域の関係機関との連携を強化　～インターンシップや進学志望者等に推奨～

新型コロナウィルス感染性拡大により、地域の関係機関との連携が難しくなったが、コロナウィルスへの対応が昨年５月から第５類に移行されたため、関係機関との連携の再開が可能になった。これまでの外部機関との連携は、ボランティア活動等での連携を考え、特別活動部が担当となり活動していた。

今年度は進路指導部が担当し、県南ＮＰＯセンターと連携して、インターンシップのほかに、ＳＤＧｓのワークショップ、フードロス活動、また、横手商工会議所主催のセミナーでは、次世代人財育成塾があり、進路希望で必要となる生徒への参加を促した。

４　進学指導について　～基礎学力の定着と諸活動歴を重視～

（１）総合型及び学校推薦型選抜入試の受験希望者の対応　～求める学生像の理解～

進学希望者を受け入れる大学や看護学校側は、募集要項に求める学生像（アドミッション・ポリシー）を設定している。

新教育課程の観点別評価の３観点では、社会学や社会福祉分野の大学を受験する

場合には、「知識・技能」の観点では、国語と英語や地理・歴史または公民を中心とした基礎学力を有している人と定めている。次に「思考・判断・表現」では、社会の出来事や人々の悩みなどについて広く考えることができる人。課外活動でリーダーシップを発揮したことのある人と定めている。そして、「主体的に学習に取り組む態度」では、人々の多様性を認め、受け入れることができる人。社会における多面的な課題に対し、立場の異なる人々と協働して主体的に地域に貢献しようとしている人と定めている。

さらに、求める学習経験などでは、例えば、コミュニケーションに関わる国語と英語を意欲的に学習していること。社会システムの理解に必要な地理・歴史または公民の学習をしていること。地域でのボランティアや社会活動に参加したことがあること。を定めている。

以上の条件を満たすためには、指定された学習能力をはじめ、総合的な探究、地域のセミナーや講演会等に参加させる必要があり、活動歴の評価を高める支援が求められる。さらに、小論文の添削や面接指導を個別に強化することが合格の近道となり、今年度は希望者全員を合格させることができた。

（２）一般型選抜入試の受験希望者の対応　～個別指導の強化～

今年度は、一般型選抜入試を受験する生徒に対して、進学補習や個別添削などを実施した。希望する生徒間で学習能力に差が生じたため、英語では教科担任に依頼し習熟度別での指導を行った。

（３）専修学校等の進学希望者への指導を強化　～志望校の分析と他校との比較～

看護学校希望の生徒には、一般の受験科目である国語や数学、英語、小論文の個別添削をお願いし、看護医療模試も継続的に実施した。

例年、看護や医療系以外の分野に合格した卒業生の動向をみると、卒業生の進学した学校、あるいは興味のある学校に資料請求、手元にある学校案内を見て保護者に相談して、卒業年次に１校のみのオープンキャンパスで受験する事例が非常に多い。

専修学校への進学は、受験する際に書類での選考が多く、受験科目数も少ないが、学費は４年制大学以上に高いケースが多い。そのため、志望校の指導教員の人数や時間、就職先と詳細な雇用形態、就職指導体制、上級資格の取得率などの項目を、最低でも３校を比較することが望まれる。書類選考で合格をした場合に、基礎学力が定着しないままに高校を卒業してしまうことを懸念している。志望校の分析が不十分で、早期に実施される総合型及び学校推薦型選抜入試で受験することを危惧し、生徒には、年次ごとのガイダンス、保護者には３・４年次ＰＴＡにおいて、上記の内容に重点を置きながら説明をした。

希望者には、専門分野への志望動機や希望分野の複数校の選定、希望職種に就けるか否かの分析、４年制大学や短期大学との比較などを入念に行い、慎重に志望校を選択させる必要がある。

５　就職指導について

（１）民間企業就職希望者への支援　～事業所の深い研究と卒業生の情報を共有～

今年度から職場定着支援員の配置がなくなり、年次部と連携しながら県内の各事業所の採用担当者から採用計画や卒業生の勤務状況、業績や事業内容等の情報を綿密に収集した。

就職希望者への補習では、夏季休業中の応募前企業見学、履歴書の書き方や応募前企業見学の礼状、教養試験、作文、面接対策を強化した。さらに、全職員による面接指導の支援をしたことで、順調に内定することが出来た。

6　今後の課題について

（１）卒業生の就職先との情報交換の徹底　～職場定着の促進と離職者の把握～

卒業生の事業所には必ず年１回は訪問し、採用担当者と情報交換し、卒業生の動向や勤務状況、採用計画、望ましい人物像などの情報を収集し、今後の指導に活かしていく必要があるが、継続して実施されていなかった。

ここ２・３年、勤務実績のある事業所に継続して就職するようになってきた。卒業生の就職実績や勤務状況が、事業所の採用担当に評価された事で、本校への指定求人にもつながっている。今後も人材の育成を大事にしている事業所との良好な関係を構築していきたい。

事業所を訪問すると、卒業生が早期に離職している場合もあり、離職の理由や勤務状況等の情報収集に加え、必要に応じては、謝罪等が必要な場合がある。次年度は就職希望者がこれまでにない人数になると予想されるため、事業所との信頼関係を密にしながら準備しなければならない。

（２）自己の希望先の研究を推進　～全員インターンシップ等のさらなる強化～

１年次での総合的な探究の時間を利用して、卒業生の事業所や上級学校の研究を行い、各自の進路目標が２年次の５月時点で設定されていると、希望する事業所にインターンシップを依頼する事ができ、活動の成果が次年度の就職の採用試験や志望校受験の際の活動実績や面接等での評価が高まることになる。

現状では自己研究が遅れ、保護者も卒業年次になってから動き出す傾向が高いため、総合的な探究の時間での進路ガイダンス、面接等を重視しながら自己分析、進路目標の設定などを早期から開始し、インターンシップでの活動が、卒業年次の応募前企業見学につながり、採用試験での評価が高まるような準備をしていきたい。

令和5年度卒業予定者の進路状況について

令和6年2月14日現在

		合格・内定内訳		
		4年次	3年次	計
進学	国公立四大	0	0	0
	私立四大	5	4	9
	短期大学	0	0	0
	専修学校等	2	4	6
	進学準備	1	0	1
	小計	8	8	16
就職	公務員	0	2	2
	民間県内	1	4	5
	民間県外	0	0	0
	就職準備	1	2	3
	小計	2	8	10
その他		0	0	0
合計		10	16	26

令和５年度こころの健康教室について

横手高等学校定時制課程
スクールカウンセラー　江村　慎平

目的

スクールカウンセラーの役割は、悩みのある生徒の相談を受けるだけに留まらない。本校生徒が抱えている多様な悩みについて、全校生徒にアプローチすることを目的として、年２回こころの健康教室を実施している。本年度は以下の通り実施した。

日時：第１回　令和５年　５月 ８日（月）16 時 30 分～17 時 20 分
　　第２回　令和５年 10 月 15 日（月）16 時 30 分～17 時 20 分

テーマ：第１回　「自分も相手も大事にできる毎日を目指して」
　　第２回　「やる気について考えてみよう」

第１回のまとめ

対人関係のトラブルから、登校できなくなる生徒が例年見られる。自分を大切にできるように、自己受容と自己肯定の大切さを伝えた。セルフコンパッションという考え方を伝え、失敗したときに自分に声をかけてあげるなど、自分をいたわる方法を紹介した。また、相手を大切にできるように、SNS の使い方を見直す時間を取った。書き言葉は読み手の受け取り方次第で印象が変わってしまう事例を紹介した。

第２回のまとめ

後期に入り、学校生活に慣れてきた部分もあるが、同時に年度当初にあったやる気が低下する時期でもある。また、転入・編入の生徒も加わり、新たなスタートとなる時期でもあることから、やる気についての話をした。ワークシートを用いて、自分がやる気が出ないときはどんなときか、どんなことをすればやる気が出るのかを振り返った。特に、朝起きて学校に行きたくないという気持ちが出たときに、徐々に体を動かしてやる気を出していく方法を伝えた。

実施後のアンケートより

こころの健康教室実施後、各生徒からアンケートを回収し、コメントを書いて返却している。アンケートによる潜在的な相談ニーズから、面談に至る生徒もいる。また、面談には至らずとも、アンケートでの悩み相談で、元気を取り戻す生徒も見られる。

生徒の記入より、「毎年繰り返し話を聴くことで、自分の心が少しずつ軽くなっているなと感じる」や、「卒業して新しい社会で生きていくときに、ストレスを解消していくために参考になる」などの声があり、一定の効果があると考えられる。

総合教育センターC 講座を受講して

臨時講師　古関　直哉

１　はじめに

今年度から定時制高校にきて、今まではあまりやれなかったことをしようと思い、興味のある C 講座を受講できるだけ申し込んでみました。申し込んだものすべてに受講許可がおり、毎月研修に行くような１年でした。この文章を通して、少しでも多くの人がＣ講座受けてみようかなと思ってくれることを期待します。

２　受講しようとおもった経緯

定時制高校に勤務するようになって、感じたことは様々な特性や経験を持った生徒が多く在籍していることです。中でも、知的障害・自閉症・いじめの被害者・不登校だった生徒への接し方に自信がなく、どのような考え方や接し方が求められるのかということが気になり、似たような項目の講座を受講しました。

３　受講した講座と感想　（おすすめしたい講座・・・◎）

① いじめの理解と対応　（◎）

いじめに対する理解や対応は、最新の知識や情報をすべての職員が身につけ、組織的に対応していく必要があると強く感じました。また、保護者対応でのマナーやコツなどすぐに使える内容も多く、おすすめです。

② 知的障害のある児童生徒への「教科別の指導」と授業改善

義務教育の授業内容のことが多かったが、その段階でつまずいたままの生徒への対応への参考になる内容でした。自閉症や LD の生徒に対しての支援や評価のあり方をより考えていく必要があると考えさせられました。また、学校としてそのような生徒の評価をどのようにしていくかということも、求められてくるのではないでしょうか。

③ 不登校や集団不適応の悩みを抱えた児童生徒の支援　（◎）

義務教育の内容が中心ではあったが、実践的にすぐ使えるような内容を教えてもらえた講座であった。担任だけでなく、全校一丸として、意図的・意識的に「働きかけ」をしていくことが求められている。

④ 児童生徒理解に生かすアドラー心理学　（◎）

心理学を元に様々な学校生活で起こることなどを考えさせられた講座であった。行動の裏にある心理を捉えて、対応・指導していくことが必要であるし、もっと自分の経験と知識を結びつけていきたいと感じました。

⑤ 自校におけるインクルーシブ教育の推進

「個々の生徒の障害の名称ではなく、その生徒の実態を把握し、効果的な支援をする必要がある」という内容が納得のいくものであった。個別対応の大切さを痛感したが、現状の大人数のクラスでの指導では、困難であるとも感じさせられました。

⑥ 教育相談に生かすカウンセリングの技法（◎）

生徒や保護者との面談等で使えるスキル・考え方を教えてもらえた講座であった。フレームの考え方が特に参考になりました。「カウンセラーのフレームと教師のフレームは相反する立場である」という考えも納得させられました。

４　講座を通して

教師という仕事は、「言葉や行動を武器に生徒を支援する」仕事だと考えています。そのためにも、様々な知識や考え方を日々アップロードしていくことが大切です。

講座を受講したことで、４月のときにはなかった知識や考え方が身につき、生徒と関わる際もいろいろな考えが頭の中に巡るようになりました。しかし、数時間程度の講座で身につけた知識なので、繰り返し使っていったり、資料を読み返したりしないと忘れてしまうものだと、この原稿を作りながら実感しました。実践し、経験することで自分の武器にしていかねばなりません。

このほかにも秋田県教育委員会免許法認定講習で３つほど特別支援関係の講座を受講しました。どの講座でも、「生徒の実態を把握し、それに応じた指導を行っていくことが求められる」というワードが出てきます。実態を常に観察し、できることを少しでも多く増やして社会進出させられるように、いろいろな立場の大人と連携していくことが求められます。そのためにも、学校間の情報の伝達や支援のあり方を、生徒のためになるように改善していくべきだと思いました。

５　最後に

年度初めにセンターから配られる冊子の C 講座のページをみてみると、自分の気になる分野や悩んでいること、よく知らないことなど多くの言葉が出てくると思います。その中の１つでもいいので、C 講座等に参加し新たな武器を手にする先生方が増えてくれることを願います。また、そのような講座に参加できる・させてくれる環境になっていくことを望みます。

最後になりましたが、講座をしてくれた大学の先生方，講座を企画してくれたセンター職員の方々，そしてたくさんの講座に参加すること・参加した際に手助けしてくれた先生方に感謝の意を表します。

【第４分科会　東北支部】

定時制と年次制を併用する本校の特色と課題

秋田県立横手高等学校　定時制課程　教頭　小林　真人

１　本校の概要

（１）沿革（制度の変遷）

昭和23年　　秋田県立横手工業高等学校定時制課程開設
昭和40年　　統合により秋田県立横手東高等学校と名称変更
平成 6年　　秋田県立横手工業高等学校に移管、普通科定時制課程開設
平成 7年　　3年修業制の導入
平成14年　　単位制・2学期制の導入
平成18年　　秋田県立横手高等学校に移管、独立校舎（青雲館）となる。
平成20年　　新校舎改築　二部制の導入
　　Ⅰ部　13：00～　／Ⅱ部17：10～　１校時～８校時（４５分授業）
平成23年　　二部制一期生の卒業式を青雲館体育館にて挙行

（２）学校運営

教育方針

教育基本法及び学校教育法の趣旨に則り、「知・徳・体」の調和のとれた人格の完成を目指すと共に、「剛健質朴」の校風のもと、「青雲の志」を抱き、「天佑自助」の精神で、国内外を含む将来社会の幸福と発展に貢献する有為な人材を育成する。

（３）　今年度の重点目標

「一人ひとりの成長の支援と社会性の育成」
～ 見守る温かい目と社会につなげるための指導 ～

＊実践指針

すべての教育活動において、「チャレンジ精神の育成」を念頭に置き、これを通して、先行き不透明な時代に挑戦し、自己と社会の未来を切り開く人材の育成を図り、人格の完成と進路目標の達成を含めた自己実現を支援する。

＊具体的な手立て　～社会で必要とされる資質・能力の育成～

１　規律ある生活

・端正な正装、爽やかな挨拶、公共ルールの遵守等も含めて、規律ある生活を通して地域や社会に信頼される人材の育成を図る。

２　確かな学力の育成

・コミュニケーション力、表現力等の多様な能力を活用する授業や活動によって、基礎基本の定着とともに各種資格・検定試験に合格できる学力を育成する。

３　人間尊重の精神及び公共の精神の涵養

・学校生活のあらゆる場面を通して、生命や人格の大切さを教え倫理観や規範意識を涵養し多様な価値観を認める人間尊重の精神、社会の一員として求められる公共の精神の育成を図る。

4　自己肯定感・自己有用感の涵養

・避難所開設訓練やボランティア活動など、多くの方々と協力し、社会に貢献する活動を通して、自己肯定感、自己有用感を育む。また、社会の一員としての自覚を高め、社会性、協調性、社会に貢献する心構えを育成する。

5　社会性の育成

・インターンシップやアルバイトなど、社会集団の一員として活動する機会を通して、謙虚な姿勢で広く社会に学ぶ心、公共に資する心を育む。

6　自己支援

・関係各機関と連携し、生徒理解のための情報収集や対応にあたっての共通理解を図り、生徒個々の自立を支援する。

2　横手高校定時制課程の現状

（1）在籍生徒数（※令和５年４月現在）

	令和５年度	令和４年度	令和３年度	令和２年度
Ⅰ部	１２８	１２５	１０９	１０１
Ⅱ部	１０	８	３	５
合計	１３８	１３３	１１２	１０６

（2）入学・転入・編入学者数

	令和５年度	令和４年度	令和３年度	令和２年度
入学	３５	３２	３６	２５
転編入	８	１２	９	１１
合計	４３	４４	４５	３６

※　４月入学生募集数（普通科Ⅰ部35人・Ⅱ部30人）・10月入学生募集（若干名）

（3）卒業者数　（　）は４年次生

	令和４年度		令和３年度		令和２年度		令和元年度	
	Ⅰ部	Ⅱ部	Ⅰ部	Ⅱ部	Ⅰ部	Ⅱ部	Ⅰ部	Ⅱ部
前期	(1)	0	0	0	0	0	(2)	0
後期	15(3)	(1)	10(15)	0	14(12)	0	15(7)	1 (3)
合計	２０		２５		２６		２８	

3　本校の特徴

（1）「スペース・イオよこて」の併設と特別支援教育の充実

《設置の目的》

秋田県南地区の「不登校」やその傾向にある小学生（高学年）、中学生、中学校卒業生（在学中に不登校状態にあり、高校への進学を希望している人）及びその保護者を対象として、次の目的で設置している。

・安心して過ごすことができる「心の居場所」を提供し、主に学習支援を通して基礎学力の補充や集団生活への適応、在籍する学校への橋渡しを行う。

・公認心理師や臨床心理士がカウンセリングやグループワークを実践し、情緒の安定を

図りながら自立心や社会性を育てる。

（２）多様な履修と単位の修得

・卒業に関する規定は修業の年限３年以上８年以内（休学期間を含む）。

・修得単位７４単位以上。

・単位の認定（教科・科目の評定が２段階〈３０点〉以上で欠課字数がＩ／３以内）

・「技能審査」「高等学校卒業認定試験合格科目」「定通併修」「通級による指導」32単位

・「ボランティア活動や就業体験等の活動による学修」「実務代替」４単位

「技能審査の成果認定単位」

・日本漢字能力検定　２級　準２級
（国語科目へ２～Ｉ単位）

・実用英語技能検定　２級　準２級
（英語科目へ３～２単位）

・情報処理検定、ビジネス実務検定
Ｉ級　２級（情報科目へ２～Ｉ単位）

・ビジネス計算実務検定　Ｉ級　２級
（商業科目へ２～Ｉ単位）

・商業経済検定　Ｉ級　２級
（商業科目へ２～Ｉ単位）

・危険物取扱者
乙種全種類　乙種Ｉ種類
（理科科目へ　２～Ｉ単位）

・その他　修学Ｂへ１～２単位

令和３年度教育課程表　　横手高校定時制

令和３年度　教育課程表

学校名	秋田県立横手高等学校（定時制課程）									
教科	科目	標準単位数	1年次		2年次		3年次		4年次	
			Ⅰ部	Ⅱ部	Ⅰ部	Ⅱ部	Ⅰ部	Ⅱ部	Ⅰ部	Ⅱ部
			単位数	単位数	単位数	単位数	単位数	単位数	単位数	単位数
国語	国語総合	4	2	2	2	2				
	国語表現	3					選択	2		
	現代文B	4					3	3	2	2
	古典A	2						選択	2	
	◆国語演習	2						選択	2	
地歴	世界史A	2					2	2		
	日本史A	2			2	2				
	日本史B	4						選択	4	
	地理A	2						選択	2	
	◆社会課題研究	2							2	2
公民	現代社会	2	2	2						
	倫理	2					選択	2		
	政治・経済	2						選択	2	
数学	数学Ⅰ	3	3	3	2	2				
	数学Ⅱ	4						選択	4	
	数学A	2					選択	2		
	数学B	2						選択	2	
理科	科学と人間生活	2						選択	2	
	化学基礎	2			2	2				
	生物基礎	2	2	2						
	地学基礎	2					2	2		
	◆理科研究	2							2	2
	◆理科実験	2						選択	2	
保健体育	体育	7～8	2	2	3	3	2	2	2	2
	保健	2	1	1	1	1				
芸術	音楽Ⅰ	2			2					
	書道Ⅰ	2				2				
英語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	2	2	2	2				
	コミュニケーション英語Ⅱ	4						選択	4	
	英語表現Ⅰ	2					選択	2		
	英語会話	2						選択	2	
	◆英語総合	2							2	2
	◆基礎英語	2						選択	2	
家庭	家庭基礎	2	2	2						
	◆家庭総合研究	2						選択	2	
情報	社会と情報	2	2	2						
	情報の科学	2						選択	2	
商業	ビジネス基礎	2～4					選択	2		
	課題研究	2～4						選択	2	
	マーケティング	2～4					選択	2		
	簿記	2～4						選択	2	
	情報処理	2～4						選択	2	
家庭(春)	フードデザイン	4～6						選択	2	
教科単位数計			18	18	18	18	17	17	18	18
総合学習		3～6	1	1	1	1	2	2	1	1
特別活動	H. R.		1	1	1	1	1	1	1	1
合計			20	20	20	20	20	20	20	20

・◆は学校設定科目
・A～D群の選択群は基本的に各年次共通の選択科目としてⅠ部及びⅡ部に開講し、他部履修は8単位まで選択できる
・2年次生は、所属する部のA群から1科目2単位を選択する
・3年次生は、所属する部のA～D群からそれぞれ1科目、合計8単位を選択する
・4年次生は、所属する部のA～D群からそれぞれ1科目、合計8単位を選択する

高等学校卒業程度認定試験規則

教　　科	試験科目	対応科目及び単位数
国　　語	国　　語	教育課程の同教科内の科目に最大４単位まで読み替える。
地理歴史	Ａ科目	教育課程の同教科内の科目に最大２単位まで読み替える。
	Ｂ科目	教育課程の同教科内の科目に最大４単位まで読み替える。
公　　民	現代社会 倫理 政治経済	教育課程の同教科内の科目に最大２単位まで読み替える。
数　　学	数　　学	教育課程の同教科内の科目に最大４単位まで読み替える。
理　　科	科学と人間生活 基礎３科目	教育課程の同教科内の科目に最大２単位まで読み替える。
外 国 語	英　　語	教育課程の同教科内の科目に最大４単位まで読み替える。

４　本校の特色と課題

（特色と課題）

「単位制と年次制を併用する本校の特徴と課題」について本校職員の意識

（良い面）

〇必履修科目を年次ごとに行う科目として設定できるため、履修、修得状況が把握しやすい。
〇不登校だった生徒が年次、学級という集団の中で学校祭や生徒会活動などに参加でき、協調性を学ぶことができる。
〇発達障害の特性を持った生徒にとって自分の強みを生かした授業を受けることができる点と、年次制併用による集団授業やルールなどの統一があるため、生徒の社会性や協調性を養うことができる。
〇多人数対応が可能。作業の効率化が図られる。
〇本校は地域連携を活動の中に位置づけているので、ホームルーム毎に取り組みやすい。
〇クラス担任がいる分生徒はどの先生に頼るのか明確になる。
〇現在の本校のやり方では、いい面が思いつきません。

（悪い面）

●必履修科目の確実な修得のために、１・２年次の「クラス単位授業」として履修設定している。そのため過年度に未修得の科目を受講しようとしても、うまくいかない場合がある。
●必履修科目の修得単位が少ない場合は実質原級留置になり、下の年次生と一緒になるため、多様な配慮が必要となる。
●発達障害の特性がある生徒は自己の管理能力が弱いこともあり、単位制と年次制の複雑な履修計画に見通しが持てない生徒もいる。
●夜遅い時間帯の授業は生徒に歓迎されない。
●自分のペースでゆっくり履修できる。というのが表向きだが、原級留置になると、一人取り残されていく感じが強いので、自分のペースというのを進めにくい。
●実質原級留置や４年次で卒業できなかった場合に下の年次に所属できず、不登校や退学する生徒が少なくない。
●２年次までの必履修科目を修得できていないということで「２年次生」を３回繰り返した生徒がいる。
●２年次以上に転入してきた生徒が、既に修得した科目を履修しなければいけない場合がある。

（終わりに）

定時制高校は、勤労青年等に高等学校教育の機会を提供するものとして制度化され、高等学校教育の普及と教育の機会均等の理念を実現する上で大きな役割を果たしてきたが、現在ではその期待や役割が大きく変化していることは承知のことと思う。

不登校や中途退学経験者等への学び直しの機会提供、困難を抱える生徒の自立支援等の面でも大きく期待されるようになっている。さらに、外国籍の生徒や発達障害等の特別な支援を必要とする生徒への対応も重要な課題となっている。

本校には現在１３５名の生徒が在籍しているが、小中学校時代に不登校を経験している生徒、心身に病気を抱え、遠方の病院に通院しながら通学している生徒、他人とコミュニケーションがうまくとれない生徒、家庭や保護者に問題があり、就学が困難な生徒、が約７割いる。そのような生徒をなんとか社会に対応し、自立していけるよう成長させ、背中を押してあげるのが我々の役割、現在周囲から期待されていることと感じている。具体的なこととしては、生徒に様々な成功体験をさせながら「高校卒業」という資格を取得させることではないだろうか。今後は更に多様な事情を抱える生徒が入学してくることが予想されるため、今よりも個の事情に柔軟に対応できる単位制を強化した教育課程の見直しが課題と感じている。

令和5年度第74回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会教育研究協議会山梨大会
第4分科会（教育制度・単位制）東北地区

単位制と年次制を併用する本校の特徴と課題

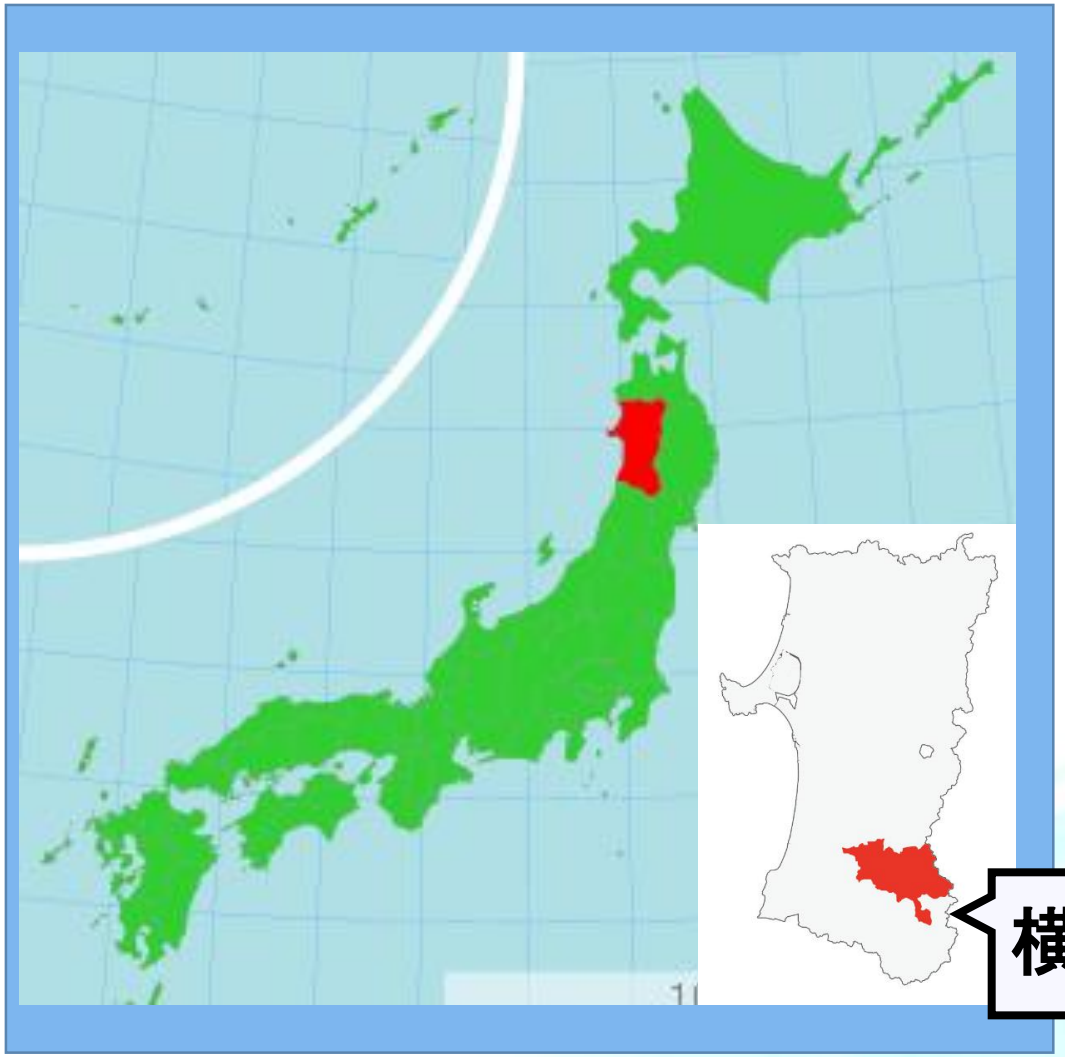
秋田県立横手高等学校定時制課程

教頭　　小林　真人

校章「青雲」

令和5年7月27日（木）：山梨県甲府市

秋田県横手市



　秋田県南部の横手盆地の中央部に位置し、県南の中心都市として栄えている。秋田県内では秋田市についで第2位の人口（８万1千人）を擁している。

　毎年2月に行われる伝統行事のかまくらや、日本三大焼きそばの一つに数えられる横手やきそばで知られている。

かまくら

横手焼きそば

いぶりガッコ・チーズ

大根の燻製の漬物
「ガッコ」＝「雅香」

後三年の役（金沢柵付近　源義家軍）

※資料　　東京国立博物館　所蔵

秋田県立横手高等学校
定時制課程について

横手校定時制の沿革

昭和23年　秋田県立横手工業高等学校定時制課程開設
昭和40年　統合により秋田県立横手東高等学校と名称変更
平成 6年　県立横手工業高校に移管、普通科定時制課程開設
平成 7年　3年修業制の導入
平成14年　単位制･2学期制の導入
平成18年　秋田県立横手高等学に移管、独立校舎となる。
平成20年　新校舎改築　二部制の導入
平成23年　二部制一期生の卒業式を青雲館体育館にて挙行

教育方針

　　教育基本法及び学校教育法の趣旨に則り、「**知・徳・体**」の調和のとれた人格の完成を目指すと共に、「**剛健質朴**」の校風のもと、「**青雲の志**」を抱き、「**天佑自助**」の精神で、国内外を含む将来社会の幸福と発展に貢献する有為な人材を育成する

横手高校定時制の概要

組織　普通科　単位制による定時制　Ⅰ部（昼間部13：00～16：40　4校時）
　　普通科　単位制による定時制　Ⅱ部（夜間部17：10～20：50　4校時）

学期　前期　4月1日から9月30日まで
　　後期 10月1日から3月31日まで

授業時数

1年間35週、1週20単位時間を標準とし、1単位時間は45分を標準

（１）在籍生徒数（※令和５年４月現在）

	令和５年度	令和４年度	令和３年度	令和２年度
Ⅰ部	１２８	１２５	１０９	１０１
Ⅱ部	１０	８	３	５
合計	１３８	１３３	１１２	１０６

（２）入学・転入・編入学者数

	令和５年度	令和４年度	令和３年度	令和２年度
入学	３５	３２	３６	２５
転編入	８	１２	９	１１
合計	４３	４４	４５	３６

※　４月入学生募集数（普通科Ⅰ部35人・Ⅱ部30人）・10月入学生募集（若干名）

（３）卒業者数　（　）は４年次生

	令和４年度		令和３年度		令和２年度		令和元年度	
	Ⅰ部	Ⅱ部	Ⅰ部	Ⅱ部	Ⅰ部	Ⅱ部	Ⅰ部	Ⅱ部
前期	(1)	0	0	0	0	0	(2)	0
後期	15(3)	(1)	10(15)	0	14 (12)	0	15(7)	1 (3)
合計	２０		２５		２６		２８	

卒業認定の規定

1・在学3年以上
2・必履修科目を履修していること
3・欠課時数が1／3を超えていない
4・74単位以上習得していること

履修体系

13:00~	13:10~	14:00~	14:55~	15:45~	16:30	17:10	17:20~	18:10~	19:05~	19:55~	20:40~
SHR	1校時	2校時	3校時	4校時	清掃	SHR	5校時	6校時	7校時	8校時	清掃
	Ⅰ部生（4時間）4年卒業						Ⅱ部生（4時間）4年卒業				
	Ⅰ部三修生（6時間）3年卒業						他部2時間				
						他部2時間			Ⅱ部三修生（6時間）3年卒業		

三修生はそれぞれ2時間の他部履修が必要

単位の修得

①定通併修で習得した単位
②高等学校卒業程度認定試験合格課目の単位認定
③技能審査の成果等の単位認定
④ボランティア活動、就業体験等の活動の修学
⑤実務代替（定職・アルバイト年間90日以上）
⑥通級による指導の単位認定

生徒の実態　（121名／138名）

年度当初に職員研修が2日行われます。生徒の以下の事項について職員全員が確認します。

・不登校経験のあるもの。
・中学校からの申し渡し事項で気になる記載（事故・いじめ等）。
・学習障害に関すること。
・身体に障害のあるもの。
・精神が不安定で通院、カウンセリングを受けているもの。
・保護者や家庭環境に問題があると思われるもの。
・生活習慣が著しく悪いもの。

生徒の実態　（121名／138名）

何かの要因で全日制高校へ通学することが困難である生徒が現在約9割！その学び場！

就職していてⅡ部通学が1人

本校の特徴　特別支援教育の充実

支援計画の作成

障害のある子どもの教育的ニーズの把握

支援内容の明確化

家庭、医療機関等との連携

スペースイオの併設（不登校児のフリースクール的役割）

スペース・イオ（設置の目的）

「自由に出入りできる私の居場所（空間）という意味。（IN・OUT）」

不登校の小学生、中学生及び中学校の卒業生を対象として、児童生徒等が存在感をもち、安心して過ごすことのできる「心の居場所」を提供する。

（１）個別の学習指導などをとおして学習支援を行うとともに、体験的学習や活動を実施し、自立心や社会性を育てる。

（２）教員や臨床心理士等による教育相談やカウンセリングを通して、児童生徒等や保護者の悩みや不安の解消を図る。

組織

職　　名	職　務　内　容	人員
校　　長	統括、入所審査	1
教　　頭 ＊定時制兼務	服務管理、入所審査、高校教育課への連絡	1
主　任（教諭） ＊定時制兼務	教育相談、児童生徒の入所に関わる業務、在籍校との連携業務、関係機関との連絡調整　等	1
副主任（臨時講師） ＊定時制兼務	学習指導、指導記録の記入、出席状況等の管理、時間割調整、教室環境の整備、ＩＣＴ教材の管理等	1
学習指導員	学習指導、余暇支援、指導記録の記入　等	2
学習指導 カウンセラー	集団適応支援（ソーシャルスキルトレーニング等）の実施、カウンセリング、学習指導、指導記録の記入　等	2
５教科主任 ＊定時制兼務	各教科の基礎講座の計画・実施（月１～２回程度）	5

本校のニーズ

- 学びの場
- 高校卒業
- 進路決定
- 集団活動

（本校職員アンケートから）

単位制の良い点

1単位から習得が可能

・原則原級留置がない
・不登校生徒が登校しやすい
・10月入学、9月卒業が可能

単位制（学年制考えない）欠点

- カリキュラムが複雑で生徒が卒業まで見通しを持てない
- 教科の指導、生徒の把握、教務的作業が煩雑である
- 仲間意識が薄くなる

（本校職員アンケートから）

年次制の良い点

担任

集団・協働

多人数対応

修学旅行

年次制の欠点（本校職員アンケートから）

・集団生活に馴染めない生徒は確実にいる。

・必履修科目が1・2年次の「クラス単位授業」に設定されている。

・自分のペースでゆっくり履修できる。しかし実際は「原級留置」を勧めにくい。

・2年次以上に転入してきた生徒が、既に習得した科目を履修する場合がある。また必要な科目を履修できない。

喫緊の課題

集団に馴染めない生徒。希望しない生徒が増加した場合の対処。

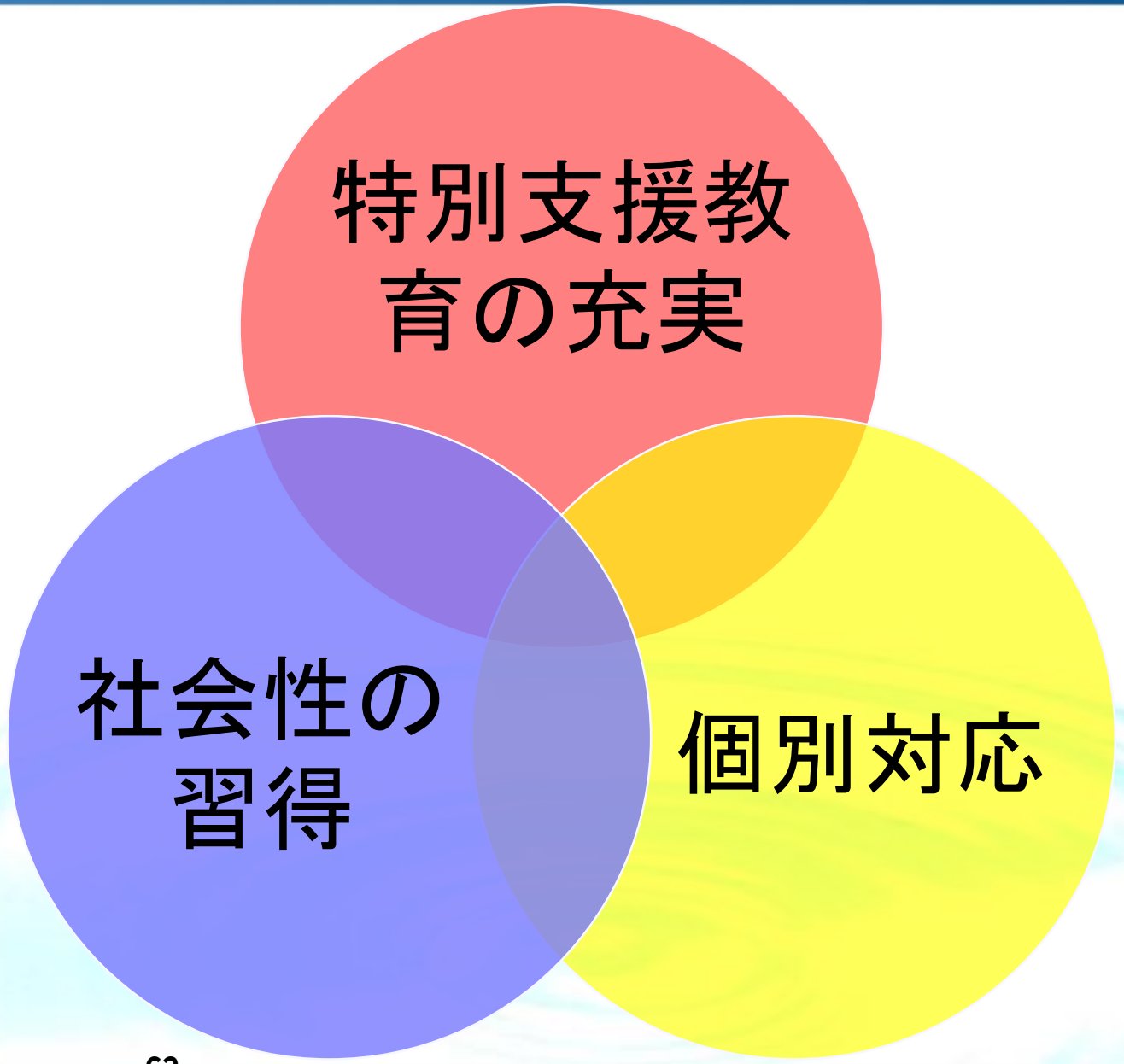
（年次制を継続するかどうか）

1、2年次に必履修科目の、履修ができなかった生徒、転入学生の所属年次と次年度の履修問題。

（開設科目と時間割の調整）

まとめ

中長期的な課題



単位制と年次制を併用する本校の特徴と課題

秋田県立横手高等学校定時制課程

御静聴ありがとうございました

校章「青雲」

～編集後記～

２０２０年の初頭からわれわれを翻弄し続けてきた新型コロナ禍は昨年５月の連休後をもって一応の区切りがつくこととなりました。何かと制約の多かった学校の教育活動も徐々にではありますが、コロナ禍以前に戻りつつあることを実感します。

本定時制課程でも大きな変化が起きつつあります。少子化に伴う生徒減が進む一方で、２０２１年以降、本定時制課程に在学している生徒の数が年を追うごとに増加する傾向にあります。様々な要因が考えられますが、本校定時制課程の教育活動が地域の方々に広く理解されているということがその一つと言えるのではないでしょうか。われわれ教職員にはこれまでの経験から得たものはもちろんのこと、新たな状況に柔軟でなおかつ的確に対応できる力量が求められていると感じます。

最後になりますがお忙しい中、寄稿してくださった先生方のご労苦に感謝を申し上げて、編集後記とします。

～令和5年度授業研修（研究授業）より～

数学Ⅰ

体育

令和５年度研究紀要
令和６年３月発行
発行者 秋田県立横手高等学校定時制課程　青雲館
〒013-0037　秋田県横手市前郷二番町10番1号
TEL(0182)32-2011　　FAX(0182)32-0133
E-mail　yoko-tei@akita-pref.ed.jp
URL　　http://www.yokote-h-tei.akita-pref.ed.jp